

H-12 景観の変化から探る世界の水辺環境の長期的トレンドに関する環境社会学的研究
(1) 水辺環境の古写真収集とディープインタビューによる比較分析手法の開発に関する研究

京都精華大学人文学部環境社会学科	嘉田由紀子
関西学院大学社会学部	古川彰
筑波大学社会科学系	鳥越皓之
京都大学文学部社会学科	松田素二

〈研究協力者〉 日本ラテンアメリカ協会 古谷桂信
甲南大学非常勤講師 乾清可
レマン湖博物館 カリーヌ・ベルトラ
元パリ国立自然史博物館 パトリシア・ペルグリーニ
マラウイ大学チャンセラール校 ローレンス・マレカノ、ジョージ・ムワレ

平成14～16年度合計予算額 16,827千円
(うち、平成16年度予算額 6,074千円)

[要旨]

本サブテーマの目的は、世界的に近代化がすすんだ20世紀初頭から現在まで、約100年間の水辺景観の長期的トレンドに埋め込まれたローカルな「水・人間の生態文化的システム」を、それぞれの現地で発掘・収集した「今昔写真」を活用しながら、「資料提示型ディープインタビュー」によるフィールドワーク手法により解明することである。世界各地の水辺から、湖沼と河川を中心に古写真資料の入手できる地域を探し、先進国、途上国あわせて、10ヶ国の水辺を選択した。先進国は、日本（琵琶湖・淀川水系）、フランス（セーヌ川）、スイス（レマン湖）、イギリス（湖水地方）、アメリカ合衆国（メンドータ湖）の5ヶ国であり、中進国として中国（北京、太湖）、途上国として、ネパール（カトマンズ盆地）、グアテマラ（アティトラン湖）、マラウイ（マラウイ湖）、ケニア（ナイロビ川）の4ヶ国を選んだ。

その結果、きわめて多様な地域条件の中で、以下の3点が共通性として浮かびあがってきた。1点目は生活用排水の利用と保全の社会的主体にかかわる変遷過程である。生活用水の入手が困難でかつ、排水による水汚染問題の深刻な水域であっても、かつては伝統的なコミュニティ型管理時代の人びとは「大地を離れない水」（湧き水、井戸、川など）に価値をおき、安全な水を確保してきたが、近代化、特に上下水道化という集中的な管渠システムの導入の過程で伝統的な社会システムが破壊され、しかし新しい管渠システム管理の社会的主体が機能していない地域である、という点である。また生活用排水問題の背景には、暗黙的な人びとの心性としてのし尿文化が隠されていることも発見された。具体的にはし尿を肥料に利用する「し尿親和文化圏 (Feces-Philia)」と、生活場面の中からし尿を排除しようとする「し尿忌避文化圏」 (Feces-Phobia) であり、「し尿忌避文化圏」 (Feces-Phobia) では便所づくりの動機は弱く、水系伝染病などの衛生被害をもたらす潜在的リスクが高い。現在世界的にすすめられつつあるグローバル技術としての下水道技術はし尿忌避文化から生まれたということもわかった。2点目は「生態系としての水域」の変化と

して、過去50-100年の間に先進国ばかりでなく途上国においても水辺移行帯（エコトーン）は人びとの生活の影響を強く受け、水草帯、ヨシ帯などの破壊が進み、魚類の生息環境や漁業的生活が脅かされていることが分かった。先進国では身近な水域の魚は食の対象からはずれ、途上国においては外来種の侵入や漁獲高の減少が悩みとなっている。3点目は「景観としての水辺」には二つの変化の方向が見られた。ひとつは「美しい水辺」を求める動きであり、もうひとつは「利便性の追求」である。先進国、途上国を問わず、いずれの水域でも美しい水辺イメージは、外部からの影響を受けながら特定の表象システムが生み出され、伝統的には「生活の場」であった水辺が「見る」ことや「観光」に特化をしてきた。と同時に、20世紀後半以降の自動車交通の拡大による道路建設など利便性の追求は、人と水の直接的な接触場面を減らし、特に子どもたちを水辺から追い出し、人の気配の少ない水辺を作り出してきた。

[キーワード] 生活用排水、上下水道システム、景観、生活の場、観光化

1. はじめに(研究目的)

本サブテーマのねらいは、現在急速に変容しつつある世界各地の水と人のかかわりの構造を、水辺の景観や生活光景を写しこんできた写真という物的証拠を元に社会人文科学的に探ることにある。具体的には、世界的に近代化がすすんだ過去50-100年間の水辺景観の長期的トレンドに埋め込まれた「水・人間の生態文化的関係システム」を、それぞれの現地で発掘・収集した「今昔写真比較」を活用した「資料提示型ディープインタビュー」によるフィールドワークの手法により、人びとの心性や価値観のレベルにまで掘り下げることで、物質的システムと感性的な価値観の仕組みを解明する。

これまで、とすれば水量・水質という物質的評価と、感性的な主観的評価という両極に分断されがちであった水環境認識の仕組みを、環境社会学や比較人類学的手法を援用することで、国際的に比較を可能とする評価軸に転換することを期待するからである。それゆえ、本研究は、一種の研究手法の開発という意味ももっている。

このサブテーマではまず現在、工業文明が支配的で、近代的行政組織による環境管理（ガバナンス）が底流となっている先進国と、自然に依存した暮らしが今も重要な、そして多くの場合、植民地支配を経験した途上国の違いを比較の軸とした。しかし、途上国とひとことでくくりえない宗教的・歴史的背景も重要である。そこで、世界各地の水辺から、先進国、途上国あわせて、10ヶ国の水辺を選択した。先進国は、日本（琵琶湖・淀川水系）、フランス（セーヌ川）、スイス（レマン湖）、イギリス（湖水地方）、アメリカ合衆国（メンドータ湖）の5ヶ国であり、中進国として中国（北京、太湖）、途上国として、ネパール（カトマンズ盆地）、グアテマラ（アティラン湖）、マラウイ（マラウイ湖）、ケニア（ナイロビ川）の4ヶ国である。

2. 研究方法をめぐる理念的見取り図と具体的方法

本調査研究グループは日本においてすでに水と人のかかわりを、地域生活者の生活の立場から研究するという方法を開発し、それを「生活環境主義」と名づけてきた¹⁾。その中から人びとが言

語にしにくい、いわば無意識の暗黙的な知識や経験をインタビューにより導き出す方法として、古写真を活用する環境変遷の研究手法として開発してきた²⁾。そこでの調査から水辺景観の変化に潜む「水・人間の生態文化的関係システム」を探るための3つの切り口の重要性が指摘された。それらは、「上水・下水システムと水辺」「生態系としての水域」「景観としての水辺」である。

「上水・下水システムと水辺」とは、人間の生活にとって必須物質としての水を、空間としての水辺につなぐ構図である。人は水を取り入れ、人間身体というトポロジー（場）の中で代謝過程をへて、し尿として水を排出する。日本では古来より「上（かみ）と下（しも）」として、人間身体にはいる水と出る水を精神的に区別してきた。そのことにより、生物的汚染による衛生問題を回避してきたが、そこには「水の神聖視」という観念も隠されている。上水・下水システムはいわば、人間の身体と人間意識を水という物質世界につなぐ情報回路でもある。

同時に水辺は魚類などの生き物を育みながら、多様で複雑な「生態系としての水域」をつくりだしてきた。その中でも、魚類を食する習慣は多くの水域と人びとを生業的につなぐ役割を果たしてきた。人の水利用のシステムをとりかこむ形で、水辺の生態系の物質循環としての健全性が、持続的な水の利用と人びとの食料の確保を可能としてきた。また水中の生き物は、子どもたちを水辺に導く重要な契機も与えてきた。遊びとしての生き物である。

さらに、「景観としての水辺」の本質は、水がそのものでは存在しえない、何らかの容器を必要とし、その容器としての湖沼や河川や湿地は、人間活動を水辺になじませる世界でもあった。つまり水を取りまく周囲の事物を含めて、人間は、地域に固有な望ましい景観を形成してきたと推測される。

このような3つの対象領域を、ここでは、日本の環境社会学の論理として重要な「認識論」「主体論」「組織論」「所有論」という4つの論理と重ね合わせて、分析を試みる。その分析対象としてのテーマ領域は理念的には、表1のような見取り図として設定できる。つまり「上水・下水システムと水辺」については、認識論的にみると、何をもってきれいな水、きたない水と判断をするのか、という汚染認識というテーマ領域を提供することになる。主体論では、上水・下水の水管理の主体性問題、組織論では、その水管理組織のありかた、そして所有論では、水そのものの所有習慣や所有権（近代化された場合には）という領域になるであろう。同様に、「生態系としての水域」では、認識のテーマ領域では生物の有用性など漁業対象生物の認識、主体論では、漁業主体の領域、そして組織論では漁業組織のあり方、そして所有論では、水中生物へのアクセスを保障する習慣や漁業権（近代的な場合には）となる。「景観としての水辺」では、認識論的にみるとどのような水辺を美しいと認識をするのか、という「美的認識」領域となり、主体論としては景観保全の主体、また組織論的には景観保全の社会組織、そして所有論的には美的景観にアクセスを許す習慣、あるいはひろい意味での「景観観賞権」などのテーマ領域となるであろう。

これらのテーマ領域について、過去100年あまりの「近代化のプロセス」での変遷過程をフォローするのが、この研究の具体的な分析領域となる。とはいえ、紙幅の関係で、すべての対象地点について、すべての領域での記述をする余裕はなく、むしろ、それぞれの領域で現場のインタビュー調査から、地元の人たちが重要とみなすテーマを選ぶ事とした。

表1 水辺景観分析のための研究テーマの領域

	認識論	主体論	組織論	所有論
上水・下水システムと水辺	汚染認識	水管理の主体性	水管理組織	水所有
生態系としての水域	生物認識・漁業	漁業主体	漁業組織	漁業権
景観としての水辺	美的認識	景観保全主体	景観保全組織	景観観賞権

本研究において、最初に最も多くのエネルギーを注いだのは、水辺を撮影した古写真の発掘と収集である。世界各地の水辺の歴史・文化的研究を行っている研究者や博物館、資料館、大学や個人の書庫などから古写真を発掘し、10ヶ国という多くの水域をカバーすることができた。

元写真は写真集やネガやプリント写真、また一部は乾板写真であった。それらを定型的に利用する仕組みがサブテーマ（2）によりつくりだされた。詳しくはそちらを参照ねがいたい。

その上で、プリントをした古写真やパソコンに入力した古写真をもって、それぞれの対象文化に馴染みのある研究者が現場調査にでかけ、その現在の場を同定し、撮影を行い、今と昔の写真資料を活用しながら関係する地域社会や地元の人びとに写真資料を提示しながらのディープインタビューを行った。しかし、また都市部などでは、昔を知る人をインタビュー相手として同定することが不可能であった。そのような場所では、水辺の人びとに今昔写真を活用したアンケート的調査を実施した。そのことで、水と人間のかかわりに潜む文化的固有性と価値観をさぐった。同時にそれぞれの地域で現在の水辺状況を表す写真を多数撮影することで、将来的な変遷研究への準備も行った。

古写真発掘と、インタビュー過程でいかなる固有文化（ローカルスタンダード）が見えてきたのか、その変遷プロセスにいわゆるグローバルスタンダードがいかに反映され、影響を与えてきたのか、各国別の研究結果を以下にとりまとめてみよう。

3. 本研究により得られた成果

本節では、地球上を地理的に西にたどり、(1)日本（琵琶湖・淀川水系）からはじめ、(2)中国（北京、太湖）、(3)ネパール（カトマンズ盆地）、(4)スイス（レマン湖）、(5)フランス（セーヌ川）、(6)イギリス（湖水地方）、(7)マラウイ（マラウイ湖）、(8)ケニア（ナイロビ川）、(9)グアテマラ（アティトラン湖）(10)アメリカ合衆国（メンドータ湖）の順で、その骨子を報告する。

(1) 日本（琵琶湖・淀川水系）

海外との比較を行う基本軸として、琵琶湖辺の水辺の構造的変遷をまず紹介する。琵琶湖辺の古写真は琵琶湖博物館にデータベースとして8万枚近くが保存されており、さらにその中から100枚は、現在地点との比較がなされた³⁾。その中から一部紹介しよう。写真1-1、1-2は、琵琶湖北部の水田、内湖、湖の景観を昭和30年(1955年)と平成9年(1995年)で比較したものだ。内湖面積が減少し、水田が直線化され、河川や湖辺も直線化されてきたことがわかる。この背景には、高度経済成長を介して工業化がすすみ、農業者は兼業化する、という社会的変動が隠されている。さらに琵琶湖の場合には、昭和47年(1972年)から平成11年(1997年)まで、25年間にわたり続けられた水資源開発であり地域開発である琵琶湖総合開発の影響が大きい。琵琶湖総合開発は下流の利水のために琵琶湖を多目的ダム化するという水資源開発であり、琵琶湖の水の管理主体がコミュ

ニティ管理から国家管理の方向に移ることを意味する。

より近接してみると、余呉川河口部について、昭和30年と平成9年で比較したものが写真2-1、2-2で、余呉川が琵琶湖に注ぐ場所である。昭和30年の古写真をみて、この川ぞいに住むMさん（大正13年生まれ、女性）は、「川で洗濯をし、お茶わんも洗った。魚がわき出るように沢山いて、お櫃をつけておくと、魚が食べてすぐにきれいになった」という。さらに「田んぼにも、イオ（ニゴロブナ）やナマズやら真っ黒になるくらいいて、子供も大人も手づかみでつかんでおかずにした」という。ここには、日常の生活が、水辺の生態系とその生産力豊かな循環の中に深く埋め込まれ、その状況をあたり前と思う心性があらわれている。この時代、人間のし尿は大便と小便が分離をされ、それぞれに野菜畑や水田に還元され、水域に直接流れ出すことはなかった。それどころか、「川におしっこをしたらおちんちんがはれる」と川への不浄を強く戒めていた。そして、万一子どもが川におしっこをしたら、「清めの塩」を流し、水神さんの許しをお願いした。



写真1-1



写真1-2



写真2-1



写真2-2

しかし、写真1-2、2-2に現れているように、昭和30-40年代の上水道の設置と河川改修、水田の圃場整備の進展、平成時代の下水道化により、曲線的な水辺は直線の景観となり、舟での移動は車にかわり、人びとの暮らしの水は、上下水道の管渠の中に閉じこめられてきた。

同様の変化は琵琶湖辺一円に見られる。写真3-1は昭和31年（1956年）、琵琶湖岸沖島の朝の水汲み光景である。写真3-2はその同じ場所、同じアングルで、そこに写っている女性ふたりは左の写真の真ん中で鍋を洗っている女性（母親）とその娘（立っている）である。このふたり（Tさん母娘）へのインタビューから、湖水を飲み水に直接使い、鍋など洗い物の汚れはすぐに魚により食べられてしまい、水場はつねに美しく水底は透明であったことが証言された。同時に、おむつや下のものなど、汚染の恐れのある物は別の洗い場でなされ、この空間的な汚染物の分離が地域コミュニティ内で強く守られた。ここには、人間の身体の上と下が、水辺の空間的「使い分け」に反映されて、水辺の生物的汚染を未然に防いでいたことがわかる。同時に、人間のし尿は大小便分離の便所でためられ、農業に再利用されていたことも分かった。ここでは、近隣集団というコミュニティの主体により、水が自主管理をされていたという社会的母体と社会組織がみえる。

そして水の所有は、地域みんなのものであった。この沖島は漁業で生計をたてているが、漁業も、地域の共同労働と共同的漁業権の中で営まれていた。

琵琶湖辺で、上水と下水が管渠にとじこめられていくプロセスを示すのが図1である。昭和30年代に全国に追随してすすんだ水道化の後、



写真3-1



写真3-2

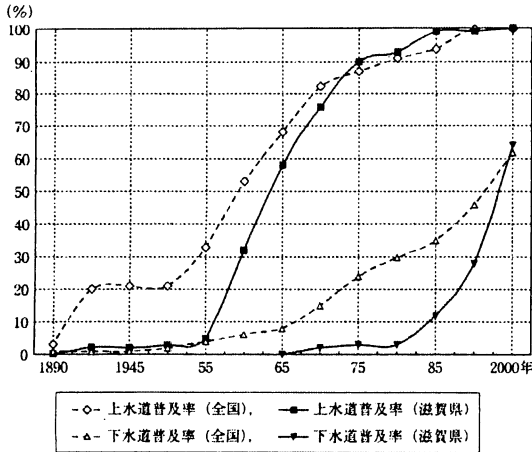


図1 上下水道の普及過程 (全国、滋賀県)

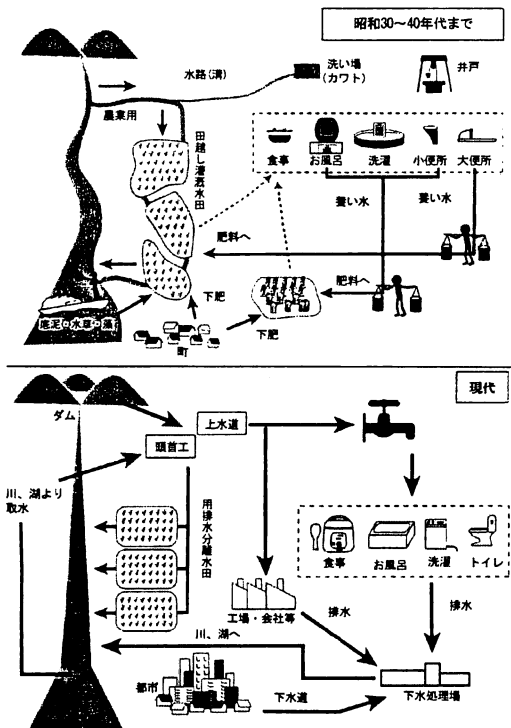


図2 琵琶湖辺の水利用システム
(上：昭和30年代 下：平成)

水質汚濁がすすみ、その対策として1980年以降、急速に下水道化がすすんだ。

琵琶湖周辺での古写真を利用したディープインタビューにより、上水と下水を厳密に分ける「上下水分離システム」が人びとの水への心性として存在し、それが空間的な水場の社会的な使い分けに反映され、結果として、人の健康と生命を維持しながら、農業生産のための肥料分を確保するという生活システムが存在していたことがわかった。その結果、琵琶湖への汚濁負荷が少なく、琵琶湖の清浄さが確保された。しかし、昭和30年代以降の上水道の導入、それによる家庭排水の増加、河川の汚染、そこで水質汚染対策として行政的にとられた下水道システムの導入により、上水源も琵琶湖、下水処理水を流す場所も琵琶湖という高度にエネルギーを利用する大循環システムが生まれ、巨額の公共投資を行いながら、水汚染問題の深刻さから解放されていない、という問題をかかえることになった。

この変換のシステムを示したのが図2である。この上下水道システムの整備と並行して、水辺はコンクリート化され、生態的健全性も失われ、琵琶湖での魚類生産は大幅に減少した。ここにはコミュニティ管理から行政管理化という水利用主体の変化をみることができる。

これらの写真利用の水環境認識から、人びとが水辺を美しいと表現するのは、水質というような物質的な評価の回路ではなく、「洗濯をした」「子どもが遊んでいた」「生き物を捕獲した」という、人びとの生活上のかかわりの存在が、評価を高めている、ということもわかった。これは認識論的にみて大変重要な発見といえる。

また、この時代の湖岸や水辺の直線化や水陸の分断化は、もともと水位の変動にあわせて産卵を行う琵琶湖の固有種の産卵条件の悪化をまねき、このような変化が、漁業資源の減少に大きな影響を与えたともいえる。もともと琵琶湖岸の漁業資源は所有論的にみると地域毎の共同体が漁業権という形で利用と処分の権利を有してきたが、これは世界的にみても特色のある、いわゆるCBO (Community Based Organization) であり、「地域に根ざした資源の自主管理」の国際的モデルともいえるが、琵琶湖総合開発の中で、漁業資源そのものが水資源開発母体である政府による補償対象となり、その資源管理の権限を弱めてきてしまった、といえる。

(2) 中国

中国については、「南舟北馬」といわれるように、水環境は南部と北部で大きく異なっている。ここでは北部の水量不足地帯の中にある大都市北京と、南部の長江下流で琵琶湖の4倍ほどの湖である太湖辺の無錫について、比較しながら検討してみたい。

① 北京

北京における水辺景観の変遷とその背景にある水利用システムの変化について、出版資料を中心に収集した古写真は20枚、現在写真は100枚である⁴⁾。その中から景観と水利用システムについての資料からエッセンスをみよう。

北京は現在1,400万人近くの人口をかかえる大都会であり、その首都の長い歴史から様々な水政策がなされてきたが、この根本は、降雨量が年平均637mmしかない水不足地域という点にある。それゆえ古来より為政者は様々な運河や湖をつくって、物資の輸送などに利用するとともに、水をとりこんだ城郭や公園を整備してきた。詳細は本報告では省略するが、写真4-1は1950年頃に撮影されたもので、1553年に建造された「永定門」とその前の運河である。水辺で洗濯している人が写っているが、この近くにすむAさんへのインタビューによると「子ども時代ここで泳ぎ、水上にはトンボが飛んでいて、それを捕まえて遊んだ」という。ここは沐浴や馬に水を飲ませる場でもあった。永定門は1957年に取り壊され、写真4-2のように、直線の運河と道路が建設され、

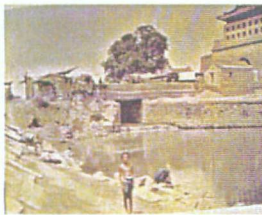


写真4-1



写真4-2



写真5-1



写真5-2

人びとが水に近づけないよう柵が作られている。ここには「使う水」から「見る水」へと変化したことがわかる。

写真5-1は清朝晩期（1909年）の内城沿いの川であり、氷ついた川上をソリで移動する人びとの姿がみえるが、現在は河の姿は全くなく、高速道路が交差する場となっている。清朝時代までの庭園や水辺の公園は貴族だけの離宮などが多く、一般の人びとが公園の景観を楽しめるようになったのは解放後（1949年）である。ここでは、水辺の風景が「政治的に囲い込まれて」いたことがわかる。つまり「景観」としての水は、政治権力により独占化されていたといえる。

北京における水利用をみると、井戸には飲み水に適した「甘い水」と飲み水には適さない「苦い水」があり、市内の水は圧倒的に苦い水の井戸が多かった。清代において、最初は官井（共同井戸）として公に水量や水質を管理していた水も、次第に金持ち（有錢有勢人）が「甘い水」のある土地を所有し、水売り人を雇い、有料の水を売り始めた。水売り人は「井窩子」とよばれ、井戸の所有者は「井主」とよばれ水の売却収入の7割を井主が、3割を水売り人が得た⁵⁾。

一方、「し尿」は、中国の他の多くの都市と同様、北京でも専門に収集し、肥料として再利用に回す業者がいた。このし尿の収集作業も官による収集から清代の間に次第に私的なものとなり、

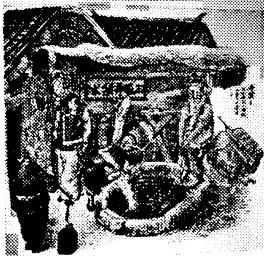


写真6-1



写真6-2



写真7

そこにこの仕事を牛耳る人が出てきて、それは「糞閥」とよばれた。飲料水を売る人たちは隣接の同業者とその販売領域を争い、自分たちが担当できる地域を「水道」と呼び、一方し尿の人たちの担当地域は「糞道」と呼ばれた。抽象化していえば、地域空間に「水道」と「糞道」の二重の網がかかっているのである。そして彼らにとってどこの地域を自分たちの担当領域にできるかということは死活に関わる大問題であった。相互に同業者と熾烈な覇権争いをした。そのためであろう、これら二種の職業の主は「両覇」といわれたのである。当時のことを描いた二つの絵を写真6-1、6-2として並べたが、背後にそれぞれに主のような人が描かれているが、かれらが「水覇」「糞覇」で、合わせて「両覇」といわれる人たちである⁹⁾。

その後、中華人民共和国が成立し、1950年代から水道が普及しはじめ、1976年の文革終了後、個人有（各家庭用）の水道が普及することになる。現在では家庭ごとに水道がつくられるようになったので、近所とのつきあいが希薄になったという。1950年代に町角毎につくられた水道も次第に家庭毎につくられるようになると水の使用量も増え、排水が河川などを汚染することになる。そして、今北京は21世紀をむかえ、オリンピック景気の中で集中管理方式の下水道が建設され、稼動している。

以上のことから北京の水利用の社会的主体について2つのことが指摘できる。1つは、日本などと比較して、「生活利用としての水」と「景観としての水」が画然と区別・管理されていたことである。それはながらく国家の中枢を占める人たちを中心にして北京という都市が形成されていたからであろう。2つめの特色は「水は独占できた」ということである。「景観としての水」は政治的な権力者によって、「生活としての水」は経済的に豊かな人（井主）によって、である。この2種の水は、順次一般住民に開放されてきた（生活としての水は家族への個別化）という経緯がある。

今「生活利用としての水」＝行政による水道化へ進み、「景観としての水」＝行政による観光化に進んだ。このふたつの方向は一般住民には基本的に喜ばれているものの、水の汚染問題という共通の課題に出くわしている。かつて「生活利用としての水」は、両覇としてし尿を肥料に再利用する社会的仕組みの中で、きれいな水を保持するしかけが井主を中心としてあり、「景観としての水」は権力を通じて清冽な水を保持するしかけがあった。今そのしかけが外されており、水質汚染に対して公共的な下水道政策が急速に進められつつある。さらに、急速にすすむ水的大量消費時代をむかえ、下水や汚濁物を権力者（行政）にお任せという過去の意識の継続がゴミ汚染問題も招いている。その結果、写真7のように、直線化され、ゴミと排水で汚染された河川が高層ビルの間で流れることになる。国家管理が進むなかで、人びとの生活だけでなく、景観の水に

かかわる主体性も失われつつある。

② 太湖

長江の下流部に位置する太湖を含む江蘇省には5,000万人以上が居住しており、中国国内でも最も人口密度の高い場所である。この稠密な人口を食料的に支えてきたのが、「魚米の郷」といわれる太湖周辺であり、長江から供給される豊富な水による水田稲作や湖での漁業、また湖周辺での養殖漁業が食料供給体制を維持してきた。さらに、中国南部では、いわゆる「池畑転換システム」といわれるように、陸上部での養蚕やサトウキビ生産、大豆生産などの副産物（蚕の糞、サトウキビの搾粕、大豆の搾滓）を養魚池に入れて魚のエサにすると同時に、豚や羊などの家畜の糞なども養魚池にいれ、魚のエサとしてきた。その上、自然に生える草や水草も養魚用のエサにまわされ、徹底的な資源循環の仕組みが発達していた。このような資源循環の仕組みはAD1000年頃からの伝統といわれているが、1950年代以来、人民公社という地域社会組織でより計画的になされていたものである。

しかし1980年代中頃にはじまる「生産請負体制」の中で、個別の農地や養魚池が個人経営化されはじめた。さらに工場などの進出により兼業化もすすみ、次第に労働力をかける養魚システムなどが崩壊しはじめ、水草の利用や農業副産物の利用が減少し、それらが水域に蓄積しはじめた。写真8-1は、1986年の太湖西部の養魚場風景である。真ん中の水路のところの舟は養魚のエサ用に水草を刈り取っている。写真8-2は、8-1とほぼ同じ場所のほぼ20年後、2004年の光景である。養魚池はまだあるが、池の周囲には家庭からのゴミや建築廃材が散乱している。



写真8-1



写真8-2

一方、生活用水としては、太湖や太湖に流れ込む運河や水路の水は、1960年代まではまだ直接に飲用可能であり、無錫市内を流れる古運河沿いでは、早朝に運河から水を汲み、煮沸せずにそのまま飲用にしたという⁷⁾。しかし1960年代に共同の水道がはいり、飲用水はそちらを利用するようになった。とはいえ、その頃はまだ洗濯や食器洗いに運河の水を使っていた。運河を生活用水として利用しなくなったのは、1980年代に個別の家庭毎に水道がはいり始めた頃という。つまり、「個別の水道がはいると排水が増え、それが運河に流れて水が汚れる→汚れるから使わなくなる→使わなくなり人びとの関心がなくなりゴミなどを投棄するものも増え余計に汚れる」という悪循環が始まった。また1991年に長江が氾濫する大洪水があり、周辺の町は床上浸水などの被害を受けた。それゆえ、運河と住宅街の間に堤防を築き、水域と陸域を分断する工事がなされた。その結果ますます人びとは運河とかかわることがなくなり、現在、無錫内部の運河は黒々とした水が流れるドブ川と化している（写真9）。

とはいえ、し尿については1990年代末に無錫市中心部には下水道が完成するが、今でも古い街では個別の家庭には便所がなく、オマルを公衆便所に運び、その公衆便所のし尿は市役所が収集

して農業用肥料に活用するという仕組みも生きている（写真10）。

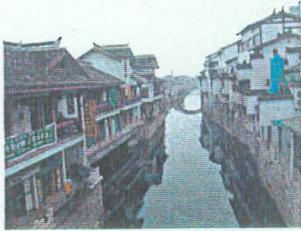


写真9

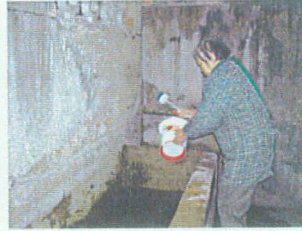


写真10

一方、1990年代中頃から太湖周辺でも急速な工業化がすすむ。工業排水も、河川や湖にほぼ無処理状態のまま流されることになる。

1990年代末には無錫の水源としての太湖はCOD（化学的酸素要求量）の値が10近くになり、水質汚染問題は深刻化した。そこで工場排水の規制などとあわせて導入されたのが生態的な水質管理方式である。具体的には、養魚池が水質汚染源として問題視され、「退漁還湖」の政策方針のもと、太湖の無錫側、五里湖の養魚場が無錫市政府の計画と実施により一斉に廃止され、都市公園化された。写真11-1は養魚池があった2000年の航空写真であり、写真11-2は養魚池を湖に戻し都市公園化する計画図である。工事は2001年から2003年にかけて行われ、延長10km以上の湖岸の水辺公園が完成した。その中心的スローガンは「獲得文明環境保護」（写真12）であり、養魚池の利用は環境破壊であるとし、湖岸を石と砂浜で積み上げ、噴水をつくり、都市公園化した。

この湖岸公園の青写真を描いたのは無錫市政府とオーストラリアの造園プランナーであり、写真13-2の噴水前のオブジェは、太湖漁業の象徴であるジャンク舟であるという。



写真11-1

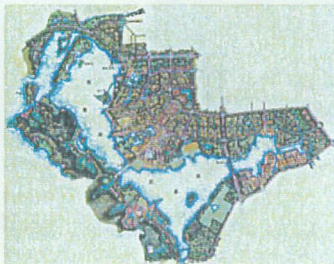


写真11-2



写真12

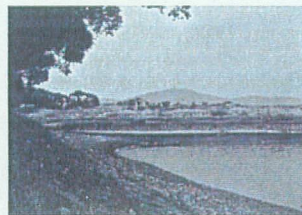


写真13-1



写真13-2

そこで、無錫における都市公園の景観が、そこに集う人びとからどのように認識されているのか、今昔写真を提示しながら、湖岸でのミニアンケート調査を行った。提示したのは五里湖の養魚場が都市公園化された写真13と写真14、それと農家がマンション建てて変化した写真15と、中の生活様式の変化を示した写真16などである。五里湖岸で憩う人たちに直接呼びかけをして、都市

公園化する前と後と、どちらの風景を個人的に好むか、というもので、その理由もあわせて尋ねた。20代から70代までの男性15名、女性17名がこの質問に回答してくれた。その結果が図3（男性）と図4（女性）である。



写真14-1



写真14-2



写真15-1

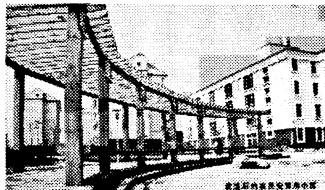


写真15-2



写真16-1



写真16-2

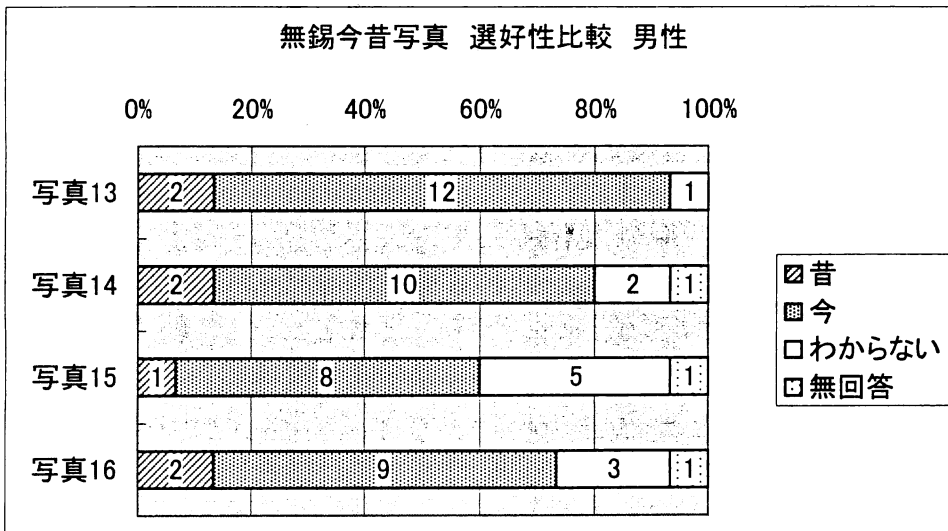


図3 変更前の風景と今の風景、どちらを好むか？（男性15名）

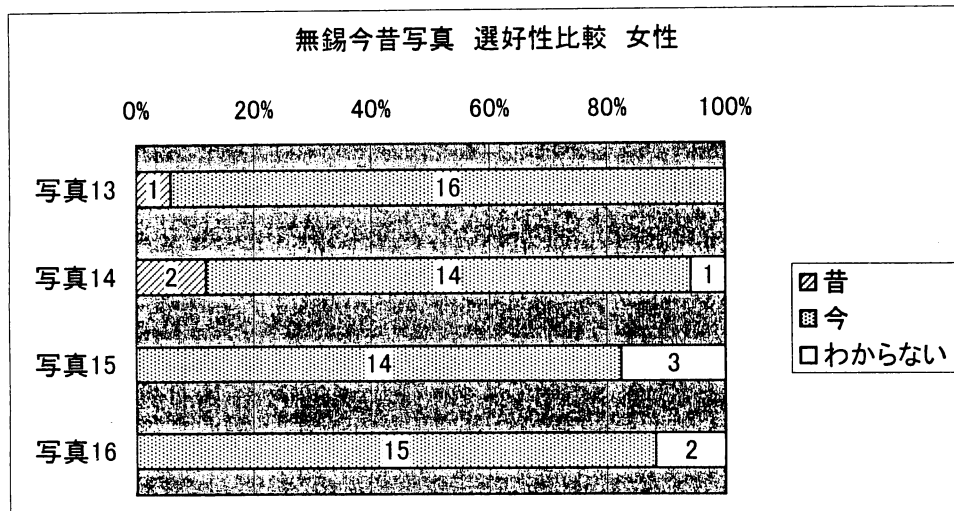


図4 変遷前の風景と今の風景、どちらを好むか？（女性17名）

これらの図から、写真12から写真16までのすべての写真セットにおいて、圧倒的に変遷後の風景が歓迎されていることがわかる。その理由は主に「今の方が美しい」「現代的」というものであった。ただし、写真15の、農村の住宅風景についてだけは、男性のうちかなりの人たちが「判断困難」と回答している。その理由は「今風のマンション型住宅は隣近所などのつきあいがなく、さびしい」というものであった。つまりここには、公の風景は現代的なものを好むが、私的生活空間では、伝統的な家屋形態を好むという意識もかいま見える。

このように、太湖の風景の変貌は一般住民に支持されているといえるが、養魚場のような生産拠点から都市公園のように、純粹に「見る水辺」を強調しているのが、ここ20年の太湖周辺の水辺の変化といえるだろう。つまり太湖周辺では、漁業はむしろ制限され、生活とのかかわりも分断化され、視覚的な公園的水辺景観が行政の手により強力にすすめられ、住民の多くもそれを支持している、という状況といえる。

(3) ネパール（カトマンズ盆地）

ネパールは高い山岳地帯から流れる急峻な河川が流れ、河川水や湧き水、井戸水が豊富に供給され、わき出していた。首都カトマンズはネパールの古都であり、ここには写真17-1に見るような河川が流れ、洗濯や沐浴、子どもの遊び場として利用されてきた。同時に、写真18-1のような、ヒティと呼ばれる掘り下げ井戸がすでに6世紀にはつくられ、1000年以上もの間、住民の生活用水を供給し、また水浴び場としても利用されてきた。この管理主体は、基本的には地域社会組織であった。井戸の管理主体はguthiと呼ばれるコミュニティであり、定期的に清掃などの維持管理がなされてきた。

ネパールにおける水と人のかかわりにおいて無視できない文化的固有性として、物質としての汚染問題と同時に、精神としての穢れ・清浄問題をさけて通ることができないということが地元でのインタビューからみえてきた。つまり、近代的な意味での物質的汚染は、必ずしも文化的な意味での穢れを意味していない。その典型が物質的には大腸菌などが多量に含まれていても「聖なる水」として信仰され続ける水である。



写真17-1



写真17-2



写真18-1



写真18-2

ネワール族のある家族での水にまつわる心性が、写真による聞き取り調査からみえてきた。水は身体を清める際には欠かせない物質である。子供の時には、家に入る前にどこで遊んできたか聞かれ、もし下位カーストの所で遊んだのであれば、水をかけられ、清められたそうである。町には身を清める為の共同水道場がそこかしこに存在する。こうした穢れを清めることを怠ると、生活が悪くなったり、礼儀正しくない子供に育ったり、育て方が良くないということで、同位のカースト内からの厳しい目や制裁が加えられる。

またカトマンズの町の中には写真19のようなジャルンと呼ばれる屋根つきの小さな建物が数多くあるが、これは朝一番の聖なる井戸水を汲みおいておき、それを地域住民や旅人が使うための水槽である。このような水槽にも水の聖性の観念が見てとれる。

ネパールにおいては伝統的に、中国や日本ほど循環的に人間のし尿を利用してきてはいない。どちらかという、し尿は日常生活から排除すべきものと考えられ、便所のある家はたった23%しかなく、残りは便所がない。便所が汚くなると家の神様が出て行くという共同的信仰もあった。夜もよおした場合などは、オマル（コプラ）などで一時的にためて置いてから捨てるに行く。共同便所は敷居もないため、恥ずかしいと思う人はわざわざ早朝に起きてなるべく人目を避けて用を足すこともしばしば見られる。写真20-1にはその場面を納めた。水路や道ばたに糞尿を集め、肥料として下層カーストであるジャミが売る仕組みになっている。しかし、山間部や農村部では便所そのものがなく、人目を避けて、野山に排便をする人びとが絶えず、それが水域汚染を助長することになる。

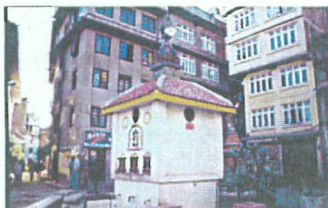


写真19

家の中を清めると当然家の外は穢れる。ゴミもそうである。大雨になれば道はたちまち川になる。ネワールの家の作りは台所が最上階（3階）に位置するため、待っていたかのように、生ゴミを入れたビニール袋が格調高い格子の窓から放り投げられる。写真20-2にはその場面を示した。ゴミが行き着く先は、重力の流れる自然に任せて、水路や河川の下流である。それは下層カーストの居住地に流れつくことになる。写真17-2は実はそのような下層カーストの居住地域を流れる河川である。1950年代の古写真（写真17-1）では、目につくゴミはほとんどなく、子どもが洗濯をし、水浴びをしていたが、その河川に今はプラスチックなどの自然にかえらないゴミが増え、上流地域、上流階層から流れつくゴミの問題は一層深刻となっている。

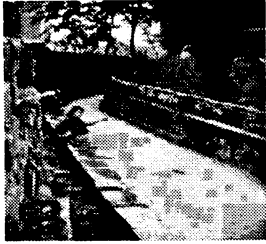


写真20-1

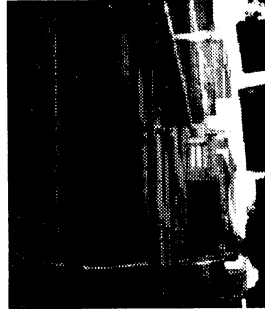


写真20-2



写真21-1



写真21-2

ネパールにおいてこのような水の上下水システムに対して、どのような対応があるのか。管渠の管理がいかに困難を伴うものであるのか、その例を示したい。ネパールを歩いていると各地に、海外からの援助団体がよかれと思ってつくった水道システムや、下水管渠がむき出しになり、破壊されている現場に出会う（写真21-1, 21-2）。

カトマンズ盆地では1970年代から世界銀行などの融資を受けて西欧式の上水道が導入され、現在、盆地の家庭の5-6割が上水道を利用している。しかし、水源不足や水道管の維持不足など技術的問題もからみ、1日の給水時間も1-2時間しかなく、多くの人が飲み水も入手しにくい状況となっている。水道システムの問題はさらに制度的にも課題が多く、メーター制度などの不備による料金の未払いや、違法な水道管接続の問題などがあり、不正受給の割合は3割を越えている。さらに上水道の導入により増大した排水を受け止める下水道は一部に管渠が引かれただけで処理場などは稼動していない。水道の管理主体も中央集権型か、あるいはNGOが直接海外の援助国と結びつき、植民地時代の代理店のような役割を果たしている場合もある。海外からの多くの援助団体もまたネパール国内のエリートも伝統的な水利用システムを遅れたモノと判断しており、それゆえ、過去の伝統的な上水システムが安定的に地域共同体により維持管理をされていた時代と比べ、近代上下水道を取り入れはじめた現在の方が水供給や排水処理の状況は悪化しているのである。

ここに、グローバルスタンダードとしての上下水道を外部からのODAなどで導入する際の大きな問題があらわれている。地域社会の共同的な維持管理組織は破壊され、しかし一方で、近代的な行政管理もなされていない。それゆえ、このような状況の中で現在、伝統的な水システムを見直し、地域コミュニティ管理にもどそうという動きも一部でている。

(4) スイス（レマン湖）

スイスとフランスの国境にあるレマン湖は、アルプスの水を集めた構造湖で、切り立った山岳地帯にあり、レマン湖沿いには2000年前のローマによる統治の時代からブドウ畑が開かれ、農業や交通の要所としての町が成立していた。しかし、湖に対して人びとは、敵がやってくる場として恐怖をもっており、湖に対して親しい思いを持つに至ったのは、18世紀以降である。コルバンのいう近代意識と欲望の中での「浜辺の発見」のテーゼはレマン湖にもあてはまる⁸⁾。その山岳湖水の風景は、19世紀中頃以降、パリ市民など都市民によりレジャーの場として人気の観光地となってきた。当時、レマン湖を宣伝するポスターに典型的に見られるように、「アルプスの山々」



写真22
1900年頃のレマン湖の観光ポスター¹⁷⁾

「青い湖水」「白い帆船」「湖岸の城」「ブドウ畑」などがレマン湖の景観としての水辺認識における表象システムをつくりだしていた。(写真22)

このポスターにあるバルク舟は、19世紀末から20世紀初頭の写真(写真23-1、24-1)にあるように、レマン湖南部からジュネーブの町などを建設するための切石を運ぶ帆船であり、湖沿いの町並は建設途上にあった。今その場は、建物はほぼ同じで、湖上には輸送用のバルク舟の代わりにレジャー用ヨットやボートが係留されている(写真23-2、写真24-2)。バルク舟で石を切り出したメイヤルリーの町が写真25-1であり、石切りと漁業で生計を立てていた町の港は埋められ、今は車の駐車場になっている(写真25-2)。写真26はシオン城の昔と今であり、12世紀に建てられたシオン城は現在でもレマン湖沿いでは最も観光客の多い場である。



写真23-1



写真23-2



写真24-1



写真24-2



写真25-1



写真25-2



写真26-1



写真26-2

レマン湖の景観が後に見るイギリスの湖水地方と異なるのは、湖が直接に土地の農業や暮らしと深く結びついてきたということであろう。写真27は、湖岸のブドウ畑であり、100年前と今とがほとんど変わらない、という驚くべき景観をなしている。湖水からの反射光が甘いブドウを育てるという風土はローマの時代から知られており、レマン湖に水が流れ込む集水域に入ったとたんブドウ畑が増える。写真28は、湖水を飲む牛の姿であり、今は住宅によって私有化されているが、かつては湖水へのアクセスの自由度が高かったことが想像できる。また、レマン湖では現在も漁業が営まれており、特にフランス側には何世代も家業として漁業を営む人たちが住む(写真29)。写真29は漁村をエコミュージアムとして観光化しつつも、漁獲により生計を立てる漁師がいることを示している。レマン湖は洗濯や遊びなど、人々が直接に水に触れる場でもあり、かつては、商売として洗濯女が大量の洗濯物を湖岸でゆすいでいた(写真30)。現在この湖辺は、湖岸の浸食をふせぐテトラポットに占拠され、人と湖の距離を隔てている。とはいえ、写真31のように、白鳥を追う家族の姿は100年前と変わらず、水辺の冊の様式を見ると、朽ち果てた後の代理品にもかかわらずの姿を求めようという景観の継続へのこだわりが見える。



写真27-1



写真27-2



写真28-1



写真28-2



写真29-1



写真29-2



写真30-1



写真30-2



写真31-1

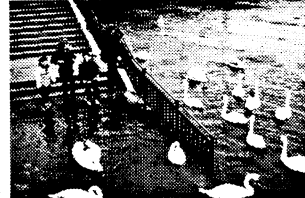


写真31-2

ここでは写真27のブドウ畑の景観の継続と変容の中に、どのような人々の歴史と思いが込められているのか、簡単に紹介しよう。

100年前と変わらない景観の場であるサン・サフォリン村でブドウ畑の経営をするモナションさんとシュバリーさんの例で考えてみたい。サン・サフォリン村には75家族が住んでおり、そのうち17家族がワイン製造をするブドウ農家を経営している。ここでは地区としてのブランドを維持しながら、ブドウ栽培と製造に関わる全ての工程を家族単位でこなしている。

1957年生まれのモナションさんは、ブドウ農家の7代目。4人兄弟のモナションさんは、父親から直接ブドウ畑を市場価格の8分の1で買い取った。土地を相続することになった時、兄弟間で争いは起きなかったという。均分相続の伝統の中で独りだけがまとめて相続できる工夫がなされていたといえる。

モナションさんには3人の子どもと小学校の先生である奥さん、退職した父親がいて、忙しい時には家族も手伝うが労働の基本は自分ひとりである。週60時間働く自分の姿を見ている子どもたちは、まだ今のところブドウ畑を継ぎたいとは言い出していない。モナションさんの祖父の世代までは、自分達が食べる野菜は自分達で作り、日曜日は山に燃料の木を取りに行くという自給自足の生活をしてきたから良かったが、現在はその3倍働かなければ家族が養えないという。

スイス政府の「国内で消費されるワインの40%を国産にする」という規制が2002年に廃止され、レマン湖周辺でできるワインは現在急速にアメリカ、チリ、オーストラリアなどからの安いワインに押されつつある。天候により良い年や悪い年がある伝統的なスイスなどのワインよりも、若者達は特別な知識を必要としない安い海外からのワインを好んで買う。同時に、スイスで雇われる労働者は社会保障、地位、賃金の面で安定しており、保証されている。レマン湖周辺で採れるブドウは伝統文化を守るという意味で、手摘みが義務付けられている。その労働コストがワインの値段に上乗せされる。レマン湖岸の急斜面を切り開いた所にあるこれらのブドウ畑は、石垣を直したり、雨で流れる土をあげたりする維持だけに年間3週間で費やさなければならない。重労働を伴う努力の末に生まれたワインが全て売れたとして、1haあたり約3万スイスフラン(約260万円)の収入が入る。このような現実の中でこれからどうやって自分たちの伝統的な経営方法を守っていけば良いのか、その答えは容易に見つからない。

サン・サフォリンの若いブドウ農家、ベルナルド・シュバリーさんの家は、住居の1階部分がワ

インを造る作業所になっており、隣接した家には両親が住んでいる。二人の小さな子どもと、現在子育てに専念中の妻がいるシュバリーさんは、モナションさんより一代若い。看護師をしている姉が一人いるが、彼が3代目を継ぐためにブドウ畑を相続した。遺産相続は問題なく進み、毎年、姉に土地代を払っているという。経験がある両親の手を借りながら、家族でブドウ栽培とワイン製造を行っている。ワインを瓶に詰めたりラベルを貼ったりする機械をモナションさんと同じように自分で所持していた。

「楽観的だ」と周りの人に言われながらも、ブドウ農家の将来はまだまだ明るいと思っており、子供が後を継いでくれることを願っているとシュバリーさん語ってくれた。赤く日焼けした顔いっぱい笑顔に浮かべて、次から次へと自分が造っているワインの味見をすすめてくれるシュバリーさんに対して、その意見に批判的かつ懐疑的な人もいる。例えばAさんは、1.5haのブドウ畑を去年売ったばかりでワイン作りへの希望を失っているようだった。

このままでは、湖岸のブドウ畑を宅地として売る事は現在禁止されている。しかし地方分権が徹底しているスイスでは、困窮する農家が増加すれば、現在は規制がかかっている農地が宅地として売買できるようになる可能性がある。土地利用規制が廃止されれば間違いなく、美しい湖の景色が眼下に広がるブドウ畑の住宅化は進むだろう。特に若い世代は高額で売れる土地を手放す危険性が高い。そうなれば昔からの風景も変わってしまうことになる。

現地を歩いてインタビューをすることにより、100年前と同じように、のどかで美しい風景の内側には、昔から続く重労働や、生き残りをかけた経済競争と現在向き合っている厳しい現実が隠れている。レマン湖周辺のブドウ畑を風景として見る側と、見られる側の隔たりは大きい。

ブドウ畑が広がるレマン湖岸を見て美しいと感じる側は、この風景は保護されるべき大切なものだとしている。見られる風景の中に生きる農家の中には未来を悲観し土地を手放す人がいる。しかしその一方で、モナションさんやシュバリーさんのようにブドウ畑を持ち、栽培からワインを「育て」販売するまでの全過程を代々自分達の手で行っていることに大きな「誇り」を持っている農家もある。レマン湖岸の町に住む一人が、一年に一本地元のワインを買ってくれるだけでレマン湖岸のブドウ畑の存続問題は解決するという。見る側と見られる側をつなぐ鍵は、土地利用規制や相続制度の工夫などの社会制度的な仕組みに加えて、「誇りをもって育てられたワイン」を、輸入ものより高く購入することをよしとする「地ワイン愛好文化」にあるといえるだろう。つまりここには景観保全が、形式的には私有地であっても、地域共同体により土地利用上の共同的申し合わせの上であり、そして同時に地域としての共有ブランドを開発し、そしてそのブランドを維持しようという人びとの共同の精神とプライドの上に成り立っていることが理解される。

(5) フランス (セーヌ川)

フランスの水辺としてセーヌ川は絵画や歌など、近代的な表象システムに深くとりこまれ、世界に広く流布されてきた。それゆえここでは、表象システムが、生活文脈の中での人々による水辺の評価システムといかなる関連にあるのか、その歴史性の中から探ってみる。あわせてパリの上下水道の歴史もさぐり、下水道が「し尿忌避文化」から生まれたことも確認したい。

社会史家のアラン・コルバンは『浜辺の誕生』において、イギリスやフランス人が海岸を水泳などの浜辺として発見するのは18世紀末から19世紀初頭にかけてであるという⁹⁾。それまで、海辺

は邪悪をもたらす恐怖の場であった。セーヌ川についても、川の景観を見る、という視点は19世紀以降の近代意識の産物である。

セーヌ川べりの過去100年の今昔写真を比較して気付くのは、景観の枠組みが大きく変化していない点だ。100年前の建物は今もほぼそこにある。セーヌ河岸の整備は18世紀後半から始まり、1853年から20年をかけてのオスマン知事の都市改造で都市景観的にはほぼ完成していたからである。

今のセーヌ川からは、生活の臭いはほとんどせず、コンクリートや石で固められた川岸を直線化された高速道路が走り、暮らしにかかわる施設はほとんどなく、川岸のプロムナードに集う人びとが水に直接触れる場所はほとんどない。しかしその同じ場所の古写真をよく観察すると、セーヌの河岸にも糸をたれる釣り人や(写真32-1)、夏の暑い日に水遊びをする子ども達がおりに(写真33-1)、リンゴやワインなどの食料品をのせた船が市場を開き(写真34-1)、洗濯船の中では洗濯がされ、川で流されずに泳ぐ為のプールまで設置されていた(写真35-1)事に気付く。子どもだけでなく、馬や犬も川岸を下りて水を飲み、水と戯れていた(写真36-1)。20世紀初頭、護岸整備がほぼ終了していたうえ、既にセーヌ川の水は直接汲んで飲めない程汚れ、水売りの水が飲用にされていたが(写真36-2)、100年前にはセーヌ川も他の水辺と同じように人びとの暮らしに近い活動の場だった。



写真32-1



写真32-2



写真33-1

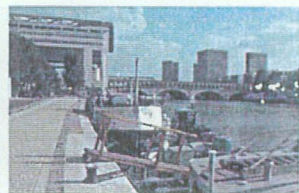


写真33-2



写真34-1



写真34-2



写真35-1

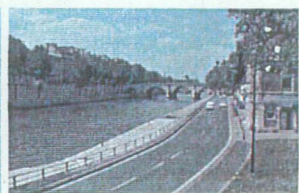


写真35-2



写真36-1



写真36-2

パリ市民の上水・下水システムの歴史を見ると、「し尿忌避文化」をもつ人口増加都市の悩みが見えてくる。中世12世紀、セーヌ川べりに人々が住み始めた頃は、セーヌ川の水を直接に飲用することができ、川水を人力でくみあげる水売り屋が生まれた。17世紀初頭にはポン・ヌフ橋の麓に揚水水車ができ、18世紀末には蒸気機関による揚水が始まり、当時の水売りは2万人もいたという。パリ市民の暮らしに上水道を供給したのは1865年、オスマンによる水道設置であり、水源

はセーヌ川のはるか上流部の湧き水に求められ、各戸給水が可能となった。しかし同時に富裕層の間では、この頃、レマン湖などからのボトル水が求められた。現在パリ上水道の水源は6割が上流からの遠隔地水であり、セーヌ川の濾過水も4割ほど入っているが、水道水への信頼は低く、飲み水はもっぱら「エビアン」「ヴィッテル」など、瓶詰め水に依存している。

一方、下水を見ると、パリ市民の汚水は、し尿を含めて全てを道路に捨て、最終的にはそのままセーヌ川に流れる習慣が中世以来の伝統であった。ルイ14世の時代、道路下に下水管をひき、いわゆる下水道をつくり、ナポレオン治世下には下水路は30kmに延びるが、排水は処理場もなく、直接セーヌ川に流された。19世紀のパリは、汚水により大変な臭気の町であったことがアラン・コルバンの研究によって知られている¹⁰⁾。パリの道路はひとたび雨がふると汚水があふれ、足元をし尿の汚れから守る「運び屋」という商売さえあった¹¹⁾（その模様は写真37にしめされている）。パリ市民の下水が、直接セーヌ川に流されないようになったのは、オスマンの都市改造が完成した19世紀末であり、工学的処理がはじまったのは1935年である。



写真37

今昔写真で見えるように、現在のパリ市民にとってセーヌ川は、車にのっとられた水辺である。このセーヌ川の岸辺を再び歩行者に返そうという努力が、最近、社会・環境派のド・ノエ パリ市長によって始められた。2002年から始められたパリ・プラーージュ（ビーチ）は、パリジャンが地中海の水辺を求めて夏のバカンスをとっている7月中旬から8月中旬までの一ヶ月間、市中心部を通る高速幹線道路を3.5km閉鎖し、そこにビーチを造るというもので、2002年度は230万人、2003年度は300万人がパリ・プラーージュに繰り出した。（写真38-1、38-2、38-3）。

幹線道路が歩行者に再び開放されるようになり、セーヌ川の岸辺には様々な活動とにぎわいが戻ったように見える。しかし100年前と比較するとセーヌ川と人の距離は遠いままだ。パリ・プ

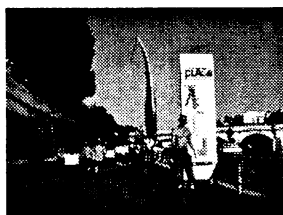


写真38-1



写真38-2



写真38-3

ラーージュ開催前は、暑さから遊泳が禁止されている川に飛び込む人が続出し、無法状態になるのではと懸念されていた。しかしその心配は無用に終わった。まれにみる猛暑の中、水着姿で集まった300万の人が誰一人としてセーヌ川に飛び込まなかったのだ。

私たちはパリ・プラーージュ中に今昔写真をもとに、42名の男女に「景観変化」と「水辺の行為」に関する聞き取り調査を行った。子どもたちがセーヌ川に入って遊んでいる写真を見てもらって（写真33-1）、あなたの子どもをセーヌ川に入らせるか、という質問には42名中40名の方が否定し、ペットさえもセーヌ川の水に触れると病気になる、と信じている人が多い。洗濯舟の写真（写真35-1）を示してセーヌ川で洗濯をするか、という問いにも42名中40名が、否定した。パリ・プラーージュに集まってきたほとんどの人々がセーヌ川は危険で汚れているから、入ることなどもつてのほかだと思っている。

100年前の人々がセーヌ川の水で泳ぎ、洗濯していたことと比較すると、川辺に戻る人々の目的

は、「見る」という視点に集約してきたことがわかる。パリ・プラーージュは、地中海など、水辺のバカンスという19世紀以降の都市ブルジョアジーによる水辺の表象システムの発見を、社会階層をこえて普及させようとする試みともいえる。とはいえ、セーヌ川の水そのものには触れたくない、というパリ市民の評価システムを変えるものではなかった。水道システムという「土地を離れた水」への不信は、「土地を離れない水」が瓶詰めされた「エビアン」や「ヴィッテル」には勝てないといえるようだ。

(6) イギリス (湖水地方)

イギリスの水辺景観の代表は、いわゆる「湖水地方」の美観といえる。湖水地方は、イギリスの表象化された景観論の柱をつくってきたが、それはナショナルトラスト運動により社会化されたという歴史的系譜をもっている。イギリスのナショナルトラストが追求した美は、低い山並にかこまれた湖水であり、いわゆるチョコレートボックスの表の絵であり「picturesque」つまり、絵のように美しい景色といわれる。その景観は、「wildであるが、安心できる wild」「伝統的であること」「静かでジェントルであること」「古い建物と湖と山(丘)」がセットになっている景観といえる。写真 39-1 には、湖水地方最古の絵といわれる 18 世紀末の Castle Head の絵を示した¹²⁾。現在ここは、湖水観光の中心となっており、写真 39-2 のように、人びとが美観を眺める場となっている。

このような湖水の景観が広まる仕組みとしては、ナショナルトラストの発生当時の grand tour と言う、イギリスの上流家庭の子弟による大陸への修学旅行がある。彼らは文化、芸術を学び、絵画を土産にもってかえることが流行したが、その理想は、17

世紀イタリア絵画を典型とした、表象としての景観イメージであった。これがいかに「見る」ための表象であったかを象徴的に物語る仕組みが「クロード・グラス」であり、これは景観を眺める現場に持っていき、グラスに景観を映して、その美観を楽しむという仕組みである。つまり現場に行っても、なおそれをガラスの中にタブローとして収めて恣意的に景色を「切り取る」ことで成り立つ、望ましい景観といえる。



写真 39-1



写真 39-2



写真 40
クロード・グラスを通じて
風景を絵画的に楽しむ¹³⁾

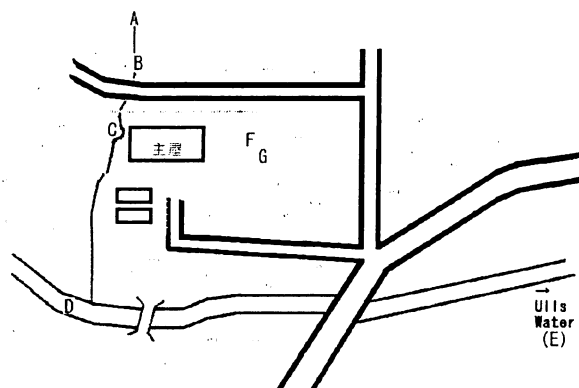


図 5 湖水地方のある農家の水利用図
湧き水を飲み水にしており湖水は利用されていない

タブローとして切り取られた湖水景観の中には、古い建物と羊飼いは必須の要素である。景観の表象システムは、生活者による評価のシステムとどのような関係にあるのかみてみよう。この羊飼いの生活現場での水利用について調べてみると、彼らは湖水は全く

利用せず、山々から生まれる湧き水に依存する暮らしで、今でもその仕組みを継承している。つまり、湧き水への評価により生活を成り立たせているのである。図5には湖水地方のある羊飼いの農家の水利用を図示した。つまり、ナショナルトラスト運動で求められた水辺景観は、現場の水利用を単に点景の「対象」として位置づけていたにすぎず、生活者の水文化とは、はるかに遠い運動であったことがわかる。

さらに湖水地方の町々を訪問し、18-19世紀の水利用の跡をたどると、そこでも湧き水や井戸水など、「土地を離れない水」が主な水源であったことがわかる。写真41-1は、1864年のKirkstun Summitという町の湧き水のある道ばたの風景であり、人も馬も湧き水を飲んでた¹⁴⁾。現在も、移動手段は馬車から車に変わったが、この湧き水飲み場は残されている。

写真42-1は、Hawksheadの町のflag streetで1890年頃のものである¹⁵⁾。道の下を小川 (Beck) が流れており、この町では、ここからも生活用水を得ていた。写真42-2は、その同じ場所、同じアングルであるが、かつてここに水くみ場があったことは、地元の古老が言い伝えて知っていただけであった。このように完全に舗装されてしまったが、今も下を川が流れていることに変わりはない。



←写真41-1

↑写真41-2

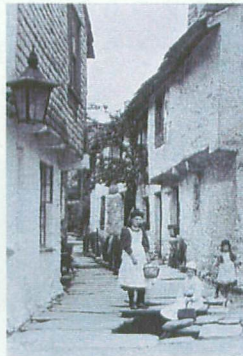


写真42-1



写真42-2

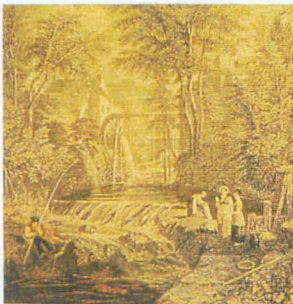


写真43-1

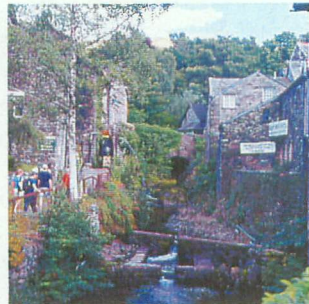


写真43-2

洗濯も川で行われており、写真43-1は、1815年のAmblesideで、女性たちが洗濯をしており、後ろには、粉ひき水車がみえる¹⁶⁾。写真43-2は、その同じ場所、同じアングルであり、現在も絵の左奥の古い水車は、使われてはいないが、記念物として存在している。これらの水は地域共同体により自主管理をされていたことが推測される。

イギリスにおいて、ナショナルトラスト運動は、美しい景観を保全するための基本思想をつくりだしてきたが、この運動はロンドンという大都会を中心とした都会人の上流階級によるイタリア絵画のコピー版としての「ピクチャレスク」を自然保護の基準にしてきており、この景観の中では地元の人たちの田舎家としての住居は、景観の要素でしかなく、彼らの生活を反映したものとはほど遠いものである。イギリスにおける水利用の伝統は、山すその湧き水や井戸水など、「土地を離れない水」に重きをおいたものであり、その痕跡を現在に残している場所は少なくない。

(7) マラウイ (マラウイ湖)

マラウイは人口1,000万人ほどのアフリカ東南部の小国であるが国土の20%を淡水が占める湖の国でもある。しかし気候は大雨の降る雨期と全く雨の降らない乾期にわかれ、灌漑施設も未整備のことから農業は雨期しかできない。生活用水は井戸や共同水道、川や湖水の水に頼る。古写真については、マラウイ国内でほとんど探索できず、植民地宗主国であったイギリスの自然史博物館などの協力をえて、1940年代の水辺・生活写真を150枚収集することができた。その中で現在地との比較写真を20ヶ所撮影し、地元へのインタビューを行った。

写真44-1は1946年、マラウイ湖南部の沿岸漁業風景であり、当時は大量のchambo (テラピアの仲間) が捕獲され乾燥し都市へ移送されたが、この同じ場所 (写真44-2) では、現在はほとんど沿岸での漁業はなくなっている。「魚はみんな沖合ににげた」と地元の人たちはいう。写真46-1も1946年の南部地域の湖岸の風景だが、当時は一時的な漁業基地であったのが1980年代から急速に人口が増加し、燃料や魚の薫製づくりのための裏の森林は大きく後退をしている。写真45-1も同じくマラウイ湖南部の湖岸近くのバオバブの木のある地域で、「ゾウに注意」の看板があり1946年段階では野生動物がたくさんいたことがわかるが、現在その場所には大きな村ができて、現在の写真にたたくMさんは「昔はゾウもワニもカバもたくさんいたが、今は国立公園にしかない」という。これらの写真からマラウイのような非工業国においても、過去数十年の間に特に水辺の沿岸域の生態システムの破壊がすすんでいることがわかる。これらの国では、過去の生態調査データなどがきわ

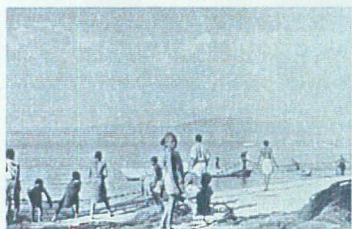


写真44-1



写真44-2



写真45-1



写真45-2

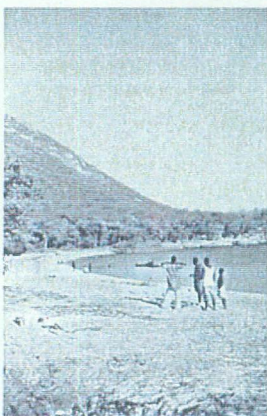


写真46-1



写真46-2



写真47-1



写真47-2

めて限られており、写真によるインタビューを活用した過去の生態系の復元は、大変重要な環境変遷史調査手法といえる。

生活用の水は、マラウイ湖辺では昔も今も湖水が直接に使われている。写真47-1は1946年、その

ほぼ同じ場所、同じアングルが写真47-2である。飲み水から洗濯などすべてに湖水が使われている。ただ、昔の写真と異なるのは、汲む道具が素焼きの壺からバケツにかわったこと、また女性の衣服が無地から柄ものにかわったことである。古写真をみてチェンベ村の女性たちは「壺は重たくて、途中でおとすこともあった。バケツの方が水汲みにはいい」という。

写真48-1、48-2にあるように、今でも湖岸は、写真47-1の1940年代と同じように、洗い物や水汲みに頻繁に使われている。し尿についてはアフリカ全域において大変根深い「忌避文化」がある。人びとはし尿、特に大便については、見るのも見られるのも、話題にするのも極力きらう。



写真48-1



写真48-2



写真49-1



写真49-2

マラウイも例外ではない。し尿を忌避するという意味では、インドやネパールと共通だが、その意味は大きく異なる。穢れ感からではないのである。どちらかという人間観に根がある。人びとが話題にしたくないし尿について、その認識や実態を語ってもらうのに、写真インタビューは大変有効であった。昔の水汲み写真などをみながら、当時の水の汚染の話をしきく。1920年頃に生まれたBさん（男性）は、「排便はできるだけ自分と関係のない山とか川でしたい」という。その理由を若い20代のGさんは、Bさんへのインタビューを終えてからコメントしてくれた。「Bさんはウイッチをこわがっている」と。つまり、糞は他人から呪術をかけられやすい。もし家の便所で大便をすると自分のものだとわかってしまう。すると呪術をかけられるおそれがあるという。それゆえ、便所がマラウイで広まらないのは、経済的に資材が入手できない、というような問題にくわえて、この呪術問題がある。マラウイ全体で便所が使える人口は半分程度と推定される。私たちが住み込み調査をしたチェンベ村で、20戸の家族を訪問して便所の有無を確認した。20戸中、11戸には便所がなかった。

写真40-2にあるように、村の周囲は大便が点在する。また固形ゴミも川の溝などにたまる（写真40-1）。これらが雨とともに川や湖に流れこみ、生物的汚染を助長するのである。コレラや下痢、ビルハルツィアなどの寄生虫病もこの地域には多い。

現在、マラウイには急速に高収量品種が導入され、主食のトウモロコシの生産にも種子や化学肥料が必須となっているが、これらはいずれも輸入品であり、外貨の少ないマラウイでは、自国の貨幣の価値が下がるにしたがって輸入品は大変高価なものとなっている。マラウイ湖辺のチェンベ村での2004年の調査では村のトウモロコシ生産の投下現金はトウモロコシの生産による価格を大きく上回っているが人びとは生存経済ゆえに、赤字によるトウモロコシ生産を続けている。図6には、村での便所不足問題が水汚染や衛生問題をもたらしている状況、さらに、人口増加に対応するための食料不足を緩和しようという高収量品種の導入「緑の革命」の経済的問題をまとめている。

このような経済、生態条件の中では、人口増加によって増加した糞尿を肥料化する方向などは生活保全のひとつの提案といえる。これは、日本の農村がかつてし尿を肥料化することで衛生問題を解決し、同時に肥料の確保をしてきた伝統から提案できるものである。チェンベ村から日本に若者

を呼び、日本の伝統的なし尿の肥料化の仕組みを学び、そのチェンベ村への導入を実験中である。今後のさらなる展開を模索中である。

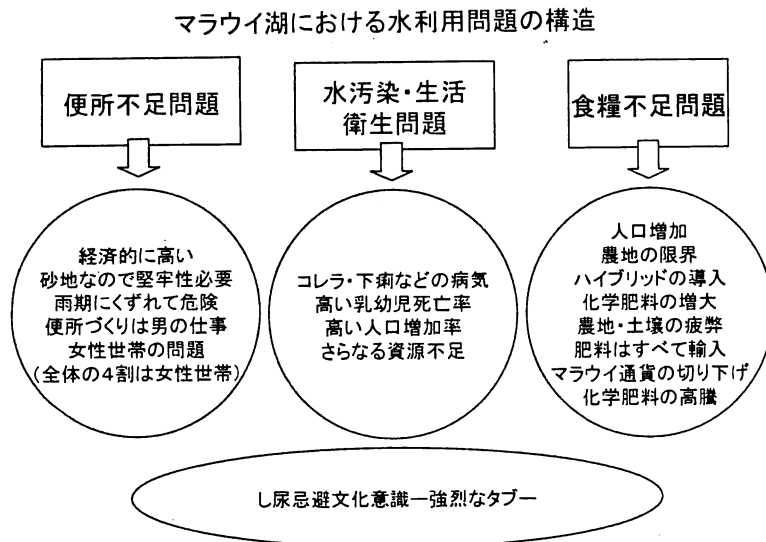


図6 マラウイ湖辺における便所問題・衛生問題と食料問題

(8) ケニア(ナイロビ川)

東アフリカの中心国家であるケニアの首都ナイロビは19世紀末から20世紀初頭にかけて、イギリス人入植者により開かれた町である。高度が高いので涼しく、マラリア蚊などの生息も少なく、白人好みの立地であり、現在300万人が居住する東アフリカ最大の都市となっている。このナイロビには、町の名前の語源となったナイロビ川が流れている。

写真50は、20世紀初頭のナイロビ川の水源地帯を撮影したものといわれ、水草が浮く水源の水場の雰囲気写されている。

写真51は第一次大戦中のナイロビ川の氾濫を写したものといわれ、雨季には氾濫を繰り返す川であった。しかし当時はまだ木々も茂り美しい川であった。ナイロビ川が生活排水や廃棄物で汚染され始めるのが1960年代の独立前後からであり、写真52-1は、川を眺める白人の足元にタイヤが転がっていることがわかる。また川べりの道路には固形廃棄物がうずたかくつまれているのが写真52-2からわかる。この頃には都市的なビルも建設されており、それぞれのビルは、独自に地下水を汲み上げ、水道施設をつくり水洗便所を利用するための下水道もつくり、ビル毎の大型浄化槽で対応してきた。



写真50



写真51-1



写真51-2



写真52-1



写真52-2

都市の拡大に応じてケニア政府は1974年には水開発省を作り、ケニアの大都市や農村部にまでいわゆる上水道を広める活動を始め。1978年にはナイロビの人口の15%に水道が行き渡り、それを2000年には100%にする、という計画が作られ、水道を敷設すると経済的に豊かなになるというキャンペーンも張られてきたが、現在の水道普及率に関する統計は筆者らの調査の範囲では探すことができなかった。行政の管理は、技術的にも制度的にもかなり低く、基本的なガバナンスの欠けた状態での水道化の問題は、ネパール、グアテマラなどよりも深刻と言える。

とはいえ人びとは水なしに生活できない。汚濁物が流れこむナイロビ川で洗濯をし、食器を洗い、時としてボトル水を購入する金がない時には飲用にも利用せざるをえない。

これらいわゆる古写真は撮影場所が特定できず、直接に今昔対比の写真はないが、現在、ナイロビ川には、固形廃棄物がうずたかくつまれ、穴式便所が川べりにつくられ人糞なども直接に川に流れこみ、生ゴミも混じり餿えた臭いがする状況となっている。雨季になるとこれらの廃棄物は一気に下流に流される。川の周辺にはいわゆる農村部からナイロビに出てきた人びとが居住しており、洪水の危険性のある水辺には社会階層的にも劣位におかれた人びとが住むという傾向がみてとれる。

1999年からこの川の浄化を求めて国連環境計画（UNEP）が中心となって「ナイロビ川流域プロジェクト」（Nairobi River Basin Project）が始められ、河川の上流から下流まで20ヶ所で水質や汚濁物の起源、動植物の分布調査などがはじめられ、河川の浄化を生態系の復元という根本から始めようというねらいとなっている。同時に地元住民の参加も促しているが、数年経ったところでまだ具体的な目にみえる成果はないようである。

ナイロビ川の事例は、行政的管理もできず、かといって住民による管理もなされず、まさに、放置され、汚濁が進む水辺の象徴ともいえる状況を呈している（写真53）。



写真53-1



写真53-2

(9) グアテマラ(アティトラン湖)

グアテマラでは、ソロラ県にあるアティトラン湖とその湖辺の町、サンチャゴ・アティトランの100年の変化をたどる写真が入手できたので、この活用により変遷をたどることができた。現在、サンチャゴ・アティトランの町では、湖の資源管理においていかに住民参画の体制を形成するか、そのプロセスにおいて今昔写真比較プロジェクトを導入し、今昔写真のポスターなどをつくり、人び

とにかつての美しかった湖を回想してもらいながら、湖への関心を高めるという活動において成果をあげている。

サンチャゴ・アティトラン市にはスペイン侵略前の先住民族であるトゥツヒル族を中心としたマヤの言語と伝統文化が色濃く伝承されており、スペインがもちこんだカソリック系キリスト教との複合的な文化が形成されている。ここには1999年以来、マヤ系の先住民政党が結成され、自治共同体による自主管理組織が市長の指導のもと、形成されつつある。

写真54-1は1920年頃のアティトラン湖辺の集落であり、写真54-2は2002年におけるその同じ場所、同じアングルである。住居は茅葺きトウモロコシの茎壁から、トタン葺きコンクリート壁に変わった。この地域の水利用は、飲用水や料理用水や、湖水を直接汲み、女性たちが頭上運搬をし、洗濯など洗い物は湖岸でというパターンであった。そこに現在水道が導入されつつあるが、費用が高く、貧しい人たちは相変わらず湖水を直接汲んで生活に利用している。写真55-1は1928年の水汲み風景であり、写真55-2は2002年におけるその同じ場所、同じアングルである。写真56-1、56-2は今でも湖水を汲む女性たちの姿であり、写真56-3は水道がはいり、洗濯を水道で行う女性の姿である。古写真を示し、女性たちに聞き取りをすると、水道がついてもやはり「洗濯は湖でするのが気持ちがいい」という人が多い。洗濯は湖ですべきものという心性が深く根付いていることがわかる。また飲み水を汲むには、早朝が割りてられ、時間的使い分けがなされているだけでなく、おむつなどの下のものを洗ってもよい場所と飲み水を汲む場所は分けられている。琵琶湖と同様の時間的、空間的使い分けがなされ、社会的に成立していることがわかる。



写真54-1

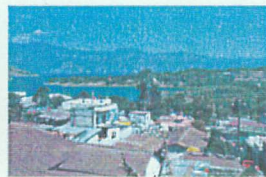


写真54-2



写真55-1

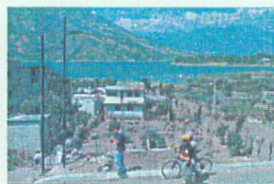


写真55-2



写真56-1



写真56-2



人間のし尿については、伝統的にはし尿を肥料に利用する伝統はなく便所はなかったが、植民地時代に地下浸透システムの導入が図られ、し尿を貯めて地下浸透をしなくなると埋めるという方式をとっていた(写真57-1)。最近海外からの援助団体が、水洗便所の導入を図るべく、下水処理施設をつくった。自治体行政を訪問して意向をきくと「欲しい」という。それで下水道建設を行った。しかし人びとは下水処理費用を払わない。上水道の支出は負担できても下水道処理費用は負担できない。ソロラの町の一部では各家庭に水洗便所をつくり下水の管はひいたが、処理場をつくる費用が捻出できなかった。それゆえ、下水は湖に直接排出され、伝統的な地下浸透システムの時代よりも湖の汚染は進んだ。この事例は、近代的なシステムは、維持管理が不備であると、その潜在的リスクは逆に大きくなることを表しているといえる(写真57-2)。

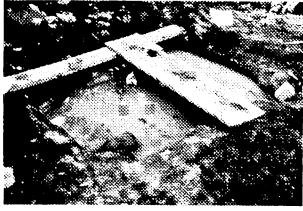


写真57-1



写真57-2



写真58-1



写真58-2



写真59

湖辺の土地の所有と利用は、国家的な登記制度はあるが実際はほとんど機能しておらず、それよりも、土地を使用しているという実態が所有を形づくることになる。近隣の間での所有争いが起きた場合は、自治体の長が持つ「杖の力」で所有の調整を行うことになる。

湖にはマシモンという、表向きはカソリック風を装う伝統的なマヤの神である大地や水神信仰もある。写真58-1がそのマシモンの神であり、写真58-2は、祭りの時にマシモンの衣服を洗い場として決められた湖岸の聖なる場である。

景観的には、山と湖、漁船、洗濯女、そして織物をする女性とトウモロコシを生産する男性という生産を組み込んだ表象システムが観光イメージをつくりだしている（写真59）が、観光化が始めるといわゆる景観への外部評価が高まり、湖岸には観光客むけのホテルなども建設されはじめている。またいわゆる貴重な自然を守るという大儀名文のもと、自然度の高い、また景観的にすぐれた土地から住民が追い出され、海外からのNGOによる景勝地の囲いこみなどの問題も発生しつつある。

(10) アメリカ合衆国（メンドータ湖）

アメリカ合衆国の中西部にあるウイスコンシン州の州都であるマジソンは人口20万人弱の小都市であるが、町の中心部にはメンドータ湖をはじめ、モノナ湖など水系がつながる4つの湖があり「マジソン4湖群」と呼ばれ、湖の汚染問題を扱う研究者や行政の間では有名な湖となっている。それは19世紀中頃からまさにこの湖が、生活排水による「富栄養化問題」に悩まされその対策に研究者や行政が精魂をつぎ込み、その途中経過がデータとして残されているからである。特に、州立大学のウイスコンシン大学には陸水学研究所が19世紀末から設置され、世界の陸水（内陸水）研究のメッカともなっている。

マジソンの町がある場所にはもともと先住のメノミニ系住民が居住していたが、植民者が入り込み土地を買収あるいは収容し、白人による町づくりが始まり、1850年に州都として指定されてが、当時の人口は1万人弱であったが、19世紀を通じて次第に人口が増大してきた。写真60から65はちょうど1900年前後のマジソンの町の状況を示している。それぞれに対応する現在写真が右側の写真である。



写真60-2

写真61-1

写真61-2

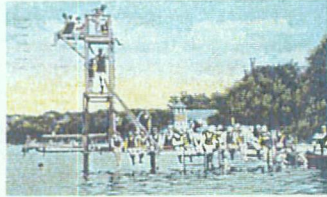


写真62-1

写真62-2

写真63-1

写真63-2

写真60には子どもたちが遊んでいるが公園化がマジソン市により始められており工事中である。その同じ場所には今、樹木が生い茂り人びとが釣り糸をたれ憩いの場となっている。写真61は湖辺近くの住宅街であり100年前に新規に開発された住宅街も今は深い樹木に覆われ高級住宅街となっている。写真62は湖辺に建設されたウイソコンシン大学の学生センターであり、かなりの建物施設がすでに建設されおり、100年経った今も学生センターとしてにぎわっている。写真63は町の中心部の道路建設の場面であり、今の写真にも当時の建物が一部残されている。写真64は19世紀末に建設された鉄道が湖に流れ込む河川を通る鉄橋であり、真新しい鉄橋と植樹直後の川べりの様子がみえるが、100年後には緑濃い川べりとなっている。アメリカにおいても自動車交通が広まったのは1920年代以降である。写真64は、ウイソコンシン大学の付属農場であり、馬による耕作がなされているが同じ場所が今は大学の付属施設となって樹木が育っている。農業場面でのトラクター導入なども1920年代である。これら一連の写真から今見る緑濃い、アメリカでも有数の「最も住みやすい町」のひとつに選定されたマジソンは100年の間に建設されてきたことがわかる。

水辺の公園化は20世紀初頭から市当局によりなされてきたが、現在、水辺の居住地には一般の固定資産税にプラスして「湖辺税」という特別税が賦課され（一般のサイズの屋敷で年間1万ドルあまりの高額である）、湖辺税は目的税として、湖の清掃費や環境保全に利用されている。朝晩2回、水辺の公園は市の清掃車がまわり浮遊ゴミなどの収集を公費で行っている。いわば行政による公共管理がなされ、受益者は税金で対応するという社会学的にいう「公私2元的管理」がなされている。とはいえ、近年、河川周辺の住民が新たに流域保全のNGOなどもつくり、ボランティア的な組織も形成されつつある。

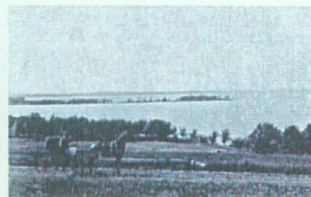


写真64-1

写真64-2

写真65-1

写真65-2

景観的にはこのような美しい町をつくりだしてきたマジソン市であるが、湖の水質問題では19世紀中頃から悩まれ続けてきた。マジソンに居住した人びとの水利用をみると、1870年代には用水は

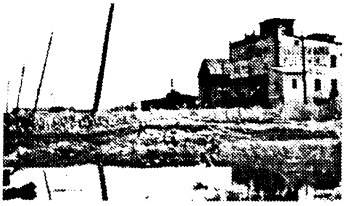


写真65-1



写真65-2

井戸水、し尿や生ゴミなどは空き地に放置したり土中に埋めていたが、人口が増大するにつれて、町中に腐敗物が臭うようになり、特に湿地帯の汚染はひどかった。写真65-1はゴミが放置されている町の湿地帯を示している。

そこで当時ヨーロッパで流行し始めた水洗便所が歓迎され、1870年代に普及しはじめる。井戸から水をくみ天井近くの水いれから一気に水を流してし尿を廃棄する技術は瞬く間にマジソン市民の間に広がるがその排水はすべて直接に河川や湖に直接流された。そして1880年代には、湖に水草が繁茂し、それが夏場には腐敗し水質は急速に悪化した。当時の地元新聞には「10年前には手ですくって直接水が飲めたのに、今は水草がはびこりその上をネコが走るほどだ」という苦情が投稿されているほどだった。1880年代にはマジソン市として上水道を敷設し、水洗便所の利用はさらに進み、湖の汚染も進む。

そこで1900年には4湖群の最上流の湖の出口に下水処理場がマジソン市の行政の手により建設され、「これで湖は汚染から解放される」という期待が生まれるが、当時の処理は今でいう2次処理までであり、排水がひとつ下流の湖に流されただけで、今度はその湖が水草で覆われる。そして、排水口はさらに下流の湖にもっていくが、そこでも新たに水草汚染が広がる。このような下流につけまわりの下水道排水政策の教訓から、1950年代には、4湖群の最下流部に下水処理場を建設し、処理水は100キロほど離れたミシシッピ川に流す工事がなされた。同時に、下水処理水は一滴たりとも4湖群には流さないという「排水バイパス計画」がつけられ、それが完成したのは1988年である。下水道建設費は最終的にはひとりあたり3,000ドルを越えている。マジソン周辺には食品工場がひとつあるだけでほかには大きな工場はなく、排水は生活系である。しかし、湖群の水質は人びとがのぞむような清浄さにはならず、夏には相変わらず水草や植物プランクトンが繁茂している。1990年代になり、汚染源は周辺の農地や家畜からである、ということで現在は農業排水の排出規制がなされ、その規制にあわない農場は強制的に廃業に追い込まれるというような強固な水政策が地元政府の手によりなされている。

マジソン4湖群の水対策の政策はまさに100年以上にわたる「富栄養化」との闘いであり、それぞれの時代の最新技術を使い、高額な公共投資をして水を処理するといういわば「し尿忌避文化」に基づく思想でなされてきたが、最終的には土地利用というような面的な自然度の高い農業排水問題にいきついている。この過程での研究開発、工学技術、税金や汚染対策制度、そして金銭的な投資を考えると、多くの途上国が上下水道による水管理というシステムを導入することはほとんど不可能であることがわかるであろう。

4. 結果と考察

本研究で、現在日常的に目にする水辺景観の歴史的背景を、現場で生活する当事者の認識と視点からさぐることができた。この結果をややモデル的に示して、統括的なまとめとしたい。

まず、上水と下水の分離・循環の仕組みについてみよう。

中国、日本では伝統的に、し尿を肥料に利用をする文化が根づいていた。これを「し尿親和文化」(Feces-Philia)と名づけよう(図7)。し尿利用のために便所が作られ、人間の大小便は水域と隔

離され、結果として水域の安全性が確保される。アフリカにみられるように、そもそも便所をつくる動機が生まれず、し尿は屋外に放置をする文化を「し尿忌避文化」(Feces-Phobia)と名づけよう。ネパールもアフリカほど強固ではないが、し尿を穢れたものとみる「し尿忌避文化」的地域といえるだろう。実はヨーロッパも、フランスの例でみてきたように、し尿を積極的に集め、肥料として利用するという思考は弱く、できたら廃棄したいという思想であった。それが雨水排除と水洗便所を目的とした「下水道文化」といえる。

特にアフリカでは大便に対する穢れ感が強いことや呪術を避けるという意味から便所をつくる動機は弱く、し尿が野山に放置され、水域汚染をもたらす。グアテマラにおいても、「し尿忌避文化」がみられるが、それが古来マヤ文明からの伝統なのか、スペイン植民地時代の影響なのか、今回の調査では明らかにされなかった。さらに図8には、ネパールやグアテマラなどにおいて、上流社会階層の汚染がいかにか下流社会階層に「つけ回し」されるのかその仕組みを示した。

今、日本では都市農村を問わず、また中国やアフリカ、南米などは都市部を中心に、グローバルスタンダードとしての水洗便所の利用を目的とした下水道が計画・建設されつつある。これらは個人の快適性と利便性からみたら望ましい技術であろうが、水域全体の安全性の確保や生態系の保全を考えた場合、公共的に必ずしも望ましい技術ではない。

現在の世界人口60億人のうち12億人が安全な水が入手できない状態にある。29億人は衛生設備、特にし尿による衛生問題、つまり「便所問題」をかかえている。近代的上下水道システムは、生物汚染ともいえる衛生問題を解決しながら水資源の確保を行うことが期待された。しかし最終処理場をもつ下水道設備が建設可能で、同時に直接飲用水として水道が利用可能な人口は世界中でたった5億人しかいない。ネパールやグアテマラの例に典型的にみられるように、上水道の費用負担も困難な人たち(全世界でひとり1日2ドル以下の収入の人口は40億人もいる)に下水道施設の維持管理費用の負担は無理である。しか

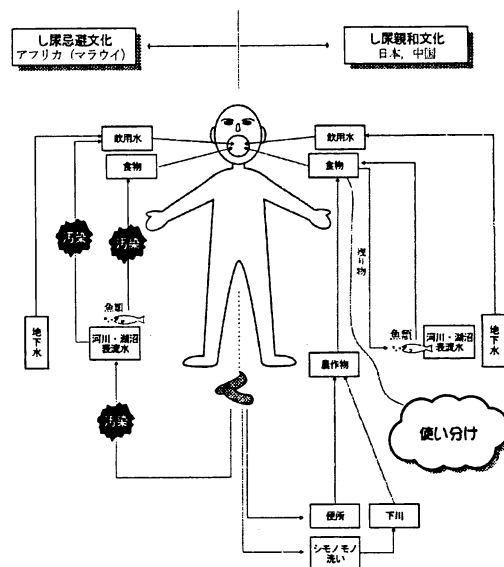


図7 し尿忌避文化とし尿親和文化

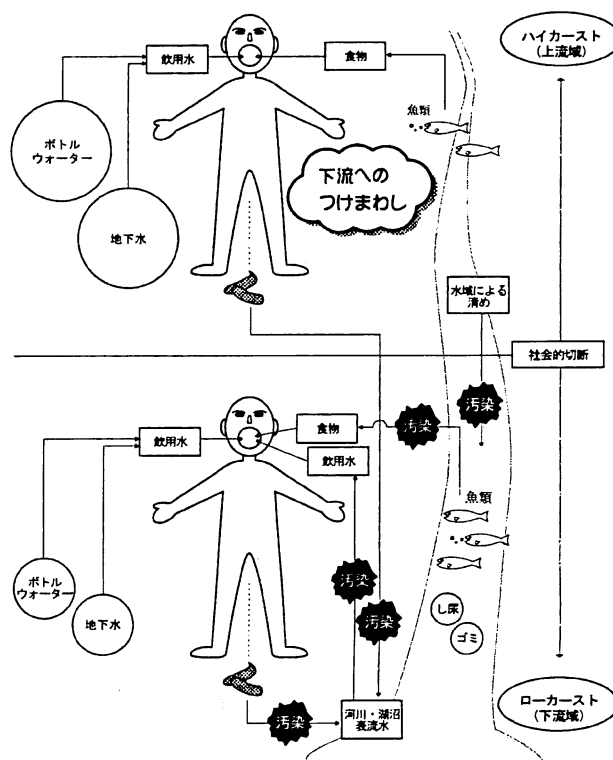


図8 社会階層による排水のつけまわしの構図

し一般には、上水道以上に下水道は維持管理費用がかかる。アメリカのマジソン4湖群では100年以上かけて、上下水道の仕組みをつくってきたが、今、農地排水をかかえ「農地に下水道をつくるわけにいかない」という技術による対策の限界が当局の関係者からも言われている。

水洗便所技術はさらに、し尿による環境ホルモン問題などが科学的に明らかになるにつれその限界が指摘されはじめている。それどころか、「西欧文明への憧れ」である水洗便所システムは本質的問題をかかえている。水の多量消費と水によるし尿の分散、そして本来肥料であるし尿の廃棄によるエネルギー損失問題、さらに建設費の莫大さと、管路の維持管理問題である。地域社会の自主管理による水辺の持続的保全を目的とする場合、高度な下水道技術とその保全はおのずと限界が内在的に埋め込まれていることになる。

水辺の生態系維持については、今回は多くの資料を提示できていないが、収集資料の中からは、途上国、先進国を問わず、沿岸域の生態系、特に、水辺水草帯、ヨシ帯などの破壊が進み、魚類の生息環境がおびやかされていることが示された。先進国においては、パリのセーヌ川の例でみられたように、自動車交通による道路の建設、その直線化は河川や湖沼の沿岸域の生態系を大きく破壊している。また途上国では、ケニアのナイロビ川のように、増大する人口による糞尿や生ゴミで河川の生態系は破壊されている。

それだけでなく、自動車交通を主体とした水辺景観の改変は、水辺を直線的な人工空間に転換することで、人びとの癒しの場としての意味を弱めてきた。北京、琵琶湖では、このような変化は顕著であるが、ネパール、マラウイ、グアテマラでも水域の景観が曲線から直線化してきたことが伺える。

今昔写真比較により、現在日常的に目にする水辺景観の歴史的背景は「望ましい景観システム」としての分析も可能とした。「望ましい景観システム」の分析においては、イギリスやフランス、スイスの歴史的仕組みの中にみられるように、社会集団としての表象システムが生まれ、流通し、定着していく社会的プロセスと、水辺そのものへの人々の生活や生産の中での評価システムとの関係性の構造がこの研究から明らかになってきた。

水や水辺と人々の景観をめぐる関係性の構造をまとめてみると、人びとは表象システムと評価システムというふたつの思考と感性の回路をもっていることが判明した(図9)。評価システムがあてにできるのは、「見る、聞く、臭い、触れる、味わう」という身体の五感感覚に根ざした要素群の関係システムである。これは物的な基盤をもつことが可能な領域を含む。それに対して、表象システムは、「宗教的信頼」や「科学信頼」など精神の領域に含まれ、近代社会にあっては「商業的(ブランド的)信頼」も追加される。さらに宗教か、科学か、商品か、という強力なシステムの効力源に対して、自らの経験的知識と習慣にもとづく生活習慣(ハビトゥス)として評価もある。これは、決して伝統的な村落社会などに優勢なだけでなく、現代社会においても有効な言説である。なぜ、自分の町の上水道技術者よりも、ヨーロッパのエビアンという湧き水に信頼を寄せるのか?それは、物理的に遠くなった水(遠い水)への生活者の無言の抵抗であり、そこで次なる商業ブランドにからめとられ、そこで、いかに過剰なエネルギー浪費を行ってしようと、「アルプスの湧き水」という「地から離れない水」への信頼が醸成されているといえる。そこには、新しい現代的なハビトゥスが創生されつつあるといえるだろう。

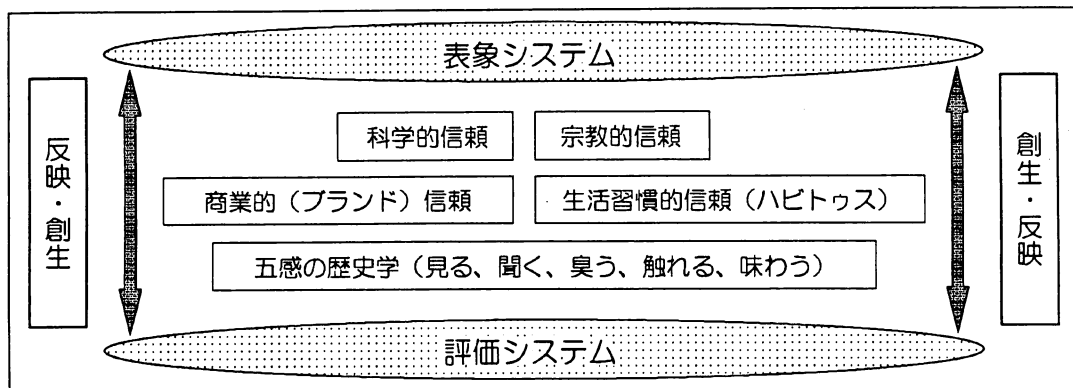


図9 水の景観をめぐる表象システムと評価システムの関係性

今の日本で見られるように、いくら水道が広まっても、あるいは、水道が広まれば広まるほど、「大地を離れない水」つまり、「湧き水」をもとにしたミネラルウォーターや、ナチュラルウォーターに人々の志向性は向いていく。19世紀中頃、パリで上水道が普及し始めたとき、瓶詰めのレマン湖水が売り出されはじめたのは偶然ではないだろう。商業主義の「売る水」思想は、長い管渠に依存する上水システムとセットでもある。ここには、水辺の景観や水の意味が、社会的表象システムと、身体五感による評価システムの中で絶えず影響し合い、創造され、流布され、変容をうけていく、文化的プロセスが見え隠れしている。

イギリスの美観の象徴でもある「ピクチャレスク」な湖水景観は、そこで暮らす羊飼いの住居は点描としての対象ではあっても意味のある存在ではなく、セーヌ川を流れる水は眺める対象ではあっても触れる存在ではない。一方、レマン湖のワイン農村の100年変わらぬ景観には、表象システムと評価システムとの間に相互にまさに創造的な関係性成立の糸口がみえる。レマン湖岸のワイン畑の背景にははりめぐらされた土地利用規制、相続制度への配慮とともに、産業として地域毎のワイン生産が成り立つための地域ブランドへの誇りと愛着が、外からの守りたい表象化された景観と、生活の中での評価のシステムをつなぐ鍵ともいえるであろう。

さらに総括として、水や水辺はどのような主体により、どのような組織的対応がなされてきたのか、社会組織論的にまとめてみよう。図10には生活用の用水と排水の供給と管理の社会的仕組みを4つの母体を想定し、その歴史的変遷をイメージした見取り図を示している。「→」がその変化の方向を示している。左下には地域のコミュニティ的管理の領域、右側には国家や行政管理の領域、左上には商業的な企業管理、右上にはNGOやNPOによるボランティア的管理の領域を示した。同様に、図11には、景観管理をめぐる社会的主体の見取り図を国別に示した。景観については、そもそも「景観」の意味が発見されたのは、近代であり、今回の調査で必ずしも十分な資料が集まっていないことから、現在の組織母体を示した。いずれの図も、今回とりあげた10ヶ国の中でも、特に具体的な調査地となった地域の事例から考察したものであり、同じ国内においても地域により状況が大きく異なることが推測される。またこのような見取り図はあくまでも、モデル的に示すものであり、さまざまな異論があるだろう。あくまでも、一次資料の比較ためのモデルと考えたい。

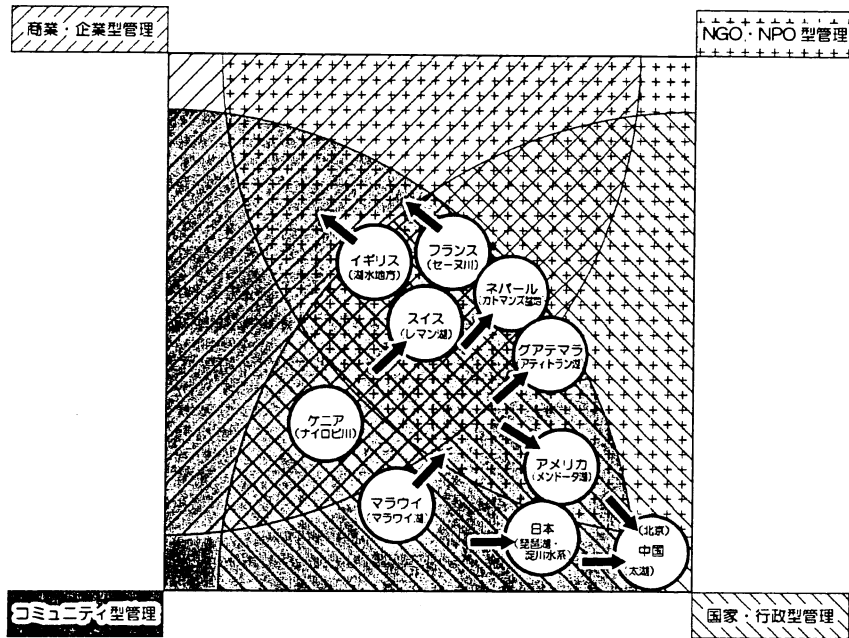


図10 生活用排水管理をめぐる社会的主体の歴史的変遷

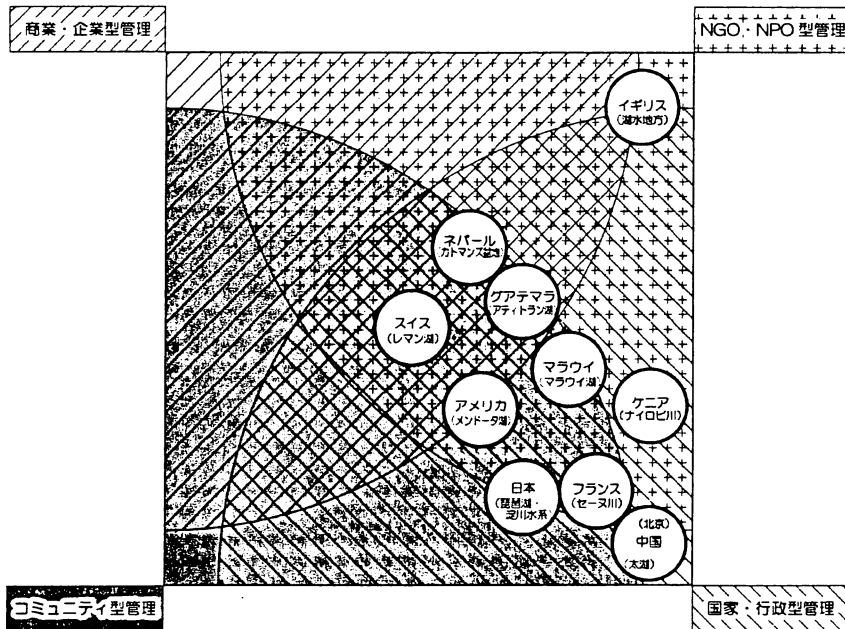


図11 景観保全をめぐる社会的管理の母体

歴史的にみると、世界各地で、まず地域に自生的なコミュニティが水管理の主要な母体であった。日本における水や漁業、水域の管理主体としての村落社会がその典型である。行政の近代化の中で、社会セクターとして「企業管理（市場）」と「国家（行政）」が生まれ、日本の琵琶湖でみてきたように、コミュニティ管理は次第に行政管理に移行するが、しかし現在でも中間組織としての「コ

「コミュニティ」が重要な役割を担っている。コミュニティとは公私とは別の共同（性）を実現し、「公—共—私」という3つのセクター体制のひとつとなってきた。しかし近代化とともに、元来共同セクターが担ってきた用排水や景観などの管理は、国家と市場に機能分化していった。そこで望まれたのは、より豊かな市場（私）、より強大な国家（公）による、豊かな生活だった。

ところが近代の後期になり、人びとの意識がそれまでの経済的な豊かさや国家による安全だけでは十分にすくい取れない、生きがいなど生活の質へと移りゆく過程で、これまでのより豊かな市場（私）、より強大な国家（公）だけでは実現できないことに気づき始めた。そこで自分たちが参加できるNPO・ボランティア（共）セクターが、豊かな生活の質を実現できる社会構成の重要なセクターになりつつある。日本の場合、多くのNPOがコミュニティを基盤としているのは、生活の質を維持するのにコミュニティの果たしてきた役割が非常に重要であったからであると推測できる。

日本（琵琶湖）を例にあげると、その管理はコミュニティから国家・NPOへと移りつつある。ことに景観となると日本の琵琶湖の場合、管理という発想なくコミュニティがそれを維持してきたのが、1980年代になって琵琶湖の景観条例が出来、一気に行政（国家）管理へと移行していくようにみえる。しかし、実際はコミュニティの果たしている役割は大きく、NPOの役割は比較的小さいのではないかと考える。

ネパール（カトマンズ盆地のパタン）の場合も同様、コミュニティの人びとによる管理からNPO管理（現状は国家がバイパスされた）へ移行しつつある。神仏への祈りと生活の必要に応じて景観の改変が行われてきたが、現在はその改変に対して、国外のNPOがブレーキをかけ、世界遺産登録されるなど、結局は国際援助がNPOをバックアップする形で景観の維持がなされている。パタン市のとなりのバクタプール市では、市街地に入るのに20ドルの料金をとって、国外のNPOと地元のNPOそして住民が町並みを維持する方向ですすんでいる。比較的ラディカルに生活と景観保護のすり合わせが急激にできあがった事例であると考えられる。

図10にはその位置関係と矢印の方向を示したが、ここからは、5つの大きな傾向が見える。1つは「コミュニティ管理から行政管理へ」という流れをもつ地域（国）であり、日本（琵琶湖・淀川水系）や中国の太湖地域が典型といえる。2つめは「私的・商業的管理から国家管理」へという流れであり、中国の北京の場合、私的に独占可能な用水やし尿は、上下水道の導入を契機に、ODAのような海外からの資金を導入しながら国家管理へと進んでいる。アメリカ合衆国においても、私的領域を拡大する形で19世紀に進んだ白人によるインディアンの土地や水辺の収奪は、国家・行政的な管理の方向に向かい、それは「納税制度」という回路を経て、徹底した上下水道システムの形成にむかっている。3つめは「国家管理から商業管理へ」という方向で、イギリスやフランスはすでに20世紀初頭に上下水道の行政管理がかなり進んでいたが、現在急速に、民間企業による商業的管理に移りつつある。4つめは「コミュニティ管理からNGO管理へ」という流れであり、ネパールやグアテマラの例でみてきたように、伝統的なコミュニティ管理が弱められる中で上下水道システムが導入されようとしているが、その機能不全により、NGOなどが国家をバイパスする形で影響力を持ち始めている事例といえる。5つめは「管理不能型」ともいえるマラウイやケニアの例であり、もともとコミュニティとしての水管理意識が弱い中で急速な人口増加の中で、水汚染に対して国家もNGOも民間も手がだせない状態といえる。生活する住民にとって、最も問題の多い地域といえる。スイスの場合にはいずれにも属さず、いわばすべての主体がバランスをもって水環境の保全に当たっている事例といえる。

さらに景観保全をめぐる社会的管理の主体をみてみると（図11）、そこには大きな3つの傾向が見える。1つは、国家管理主導型であり、日本、フランス、中国、アメリカなどであり、景観保全をさまざまな条例や法律により遂行しようという国家群であり、日本では琵琶湖で1990年代に景観条例が施行されたが、2004年には国家的なレベルで景観法が制定され、文化的景観も含めて行政が主導する方向が示されている。中国においても、太湖の例に典型的に示されるように、自然景観の保全も含めて行政と国家の主導で景観の改変がなされている。フランスのパリでは19世紀中頃に行政によるパリの大改造計画が基本構造となり、近年のパリ市内の建物規制やセーヌ川べりの利用規制などがなされてきた。2つめは、「国家とNGOの相補的管理」であり、ネパールやグアテマラに典型的にみられるように、表むきは国家管理であるが、実態は、国際的なNGOが自然保護や景観保全に対して、具体的な政策を提案、実行している事例である。マラウイやケニアも、自然保護区の国立公園化や世界遺産化などで、国家的管理の中に国際NGOの政策が織り込まれている。3つめは「NGO独立管理」であり、この展開が、イギリス湖水地方のナショナルトラストの形成によるものである。ここでは、NGOが土地の利用権だけでなく、所有権もとりこむことで、長期にわたる景観保全の政策を実現しているといえる。これらいずれの例からもはずれるのがスイスであり、景観保全はコミュニティや農家、観光業、国家、そしてNGOなどさまざまな主体がそれぞれの役割を發揮しながら、総体としての景観保全に貢献しているといえるだろう。

水の政策は、このような文化システムまで含めて、総体としての水と人間のかかわりの仕組みを読み解いていく必要がある。過去100年にわたる世界10ヶ国の今昔写真によるインタビュー調査により、このような文化的システムの内実が次第にみえてきたことは本研究のひとつの重要な成果といえるだろう。

5. 引用文献

- 1) 鳥越皓之・嘉田由紀子編『水と人の環境史—琵琶湖報告書』、1984年、御茶の水書房。鳥越皓之編『環境問題の社会理論』、1989年、御茶の水書房。
- 2) 琵琶湖博物館（嘉田由紀子・小笠原俊明）編、私とあなたの琵琶湖アルバム、1997年、琵琶湖博物館発行。嘉田由紀子、『水辺ぐらしの環境学—日本と世界の湖から—』、昭和堂、2001年。
- 3) 琵琶湖博物館（嘉田由紀子・小笠原俊明）編、私とあなたの琵琶湖アルバム、1997年、琵琶湖博物館発行。琵琶湖博物館ホームページでこのうち7,000枚は一般公開。琵琶湖についての古写真の撮影者は前野隆資さん、現在写真の撮影者は古谷桂信さんである。
- 4) 華孟陽, 張洪杰『老北京的生活』山東画報出版社、p101-103、2000年。
- 5) 楊信『京城老行当』新華出版社、p97-99、2002年。
- 6) 楊信、同上。
- 7) 2005年3月25日、無錫市外事弁公室、周氏へのインタビューによる。
- 8) アラン・コルバン（福井和美訳）『浜辺の誕生—海と人間の系譜額』（原著、1988年）、藤原書店、1992年
- 9) アラン・コルバン、同上。
- 10) アラン・コルバン（山田登世子訳）『においの歴史—嗅覚と社会的想像力』（原著、1982年）、藤原書店、1990年。
- 11) アラン・コルバン（山田登世子訳）『においの歴史—嗅覚と社会的想像力』（原著、1982年）、

藤原書店、1990年、口絵より。

- 12) William Gell A Tour in the Lakes 1797 (ed. William Rollinson, Smith Settle Ltd, 2000)
- 13) アーミッドミュージアム所蔵
- 14) Peter Bicknell (ed.), The Illustrated Wordsworth's Guide to the Lakes, Webb&Bower, 1984, p13
- 15) John Marsh & John Garbutt, Wordsworth's Lake Land, Sutton Published Ltd., 1997, p90-91
- 16) John Marsh & John Garbutt, Wordsworth's Lake Land, Sutton Published Ltd., 1997, p14
- 17) Paul Guichonnet, Le guide du Lemán, 1988, Nyon:La Manufacture, p193.

6. 国際共同研究等の状況

- (1) Lake Malawi Nkundo Project, Dr. Lawrence Malekano/University of Malawi-Chancellor College, Mr. George Mware University of Malawi-Chancellor College, 2003年3月の世界水フォーラムに参加した若者、子どもたちを中心として編成しつつある地域社会における水の衛生問題研究、実践のためのプロジェクト（財政支援：河川環境管理財団）。
- (2) AMSCLAE, Autoridad para el Manejo Sustentable de la Cuenca del Lado de Atitlan y su Entorno. 日本ラテンアメリカ協会とアティトラン湖畔の市が共同で行っている湖沼の持続的資源保全に関するプロジェクト（財政支援：Santiago Atitlan市、日本ラテンアメリカ協会）。

7. 研究成果の発表状況

(1) 誌上発表(学術誌・書籍)

<論文(査読あり)>

- ① 松田素二：個人性の社会理論序説—非西欧社会のセルフ像を通して『現代社会学フォーラム』関西社会学会・世界思想社 33-42(2002年5月)
- ② 松田素二：フィールドワークの窮状を超えて』『社会学評論』53-4(212)号、日本社会学会 499-515(2003年3月)
- ③ 松田素二：変異する共同体、『文化人類学研究』第69巻2号 日本文化人類学会247-270(2004年9月)
- ④ 嘉田由紀子：文化型としての所有制度と環境保全—自然所有の内発的過程にみる法秩序構築の可能性, 法社会学58号, 日本法社会学会(2004)
- ⑤ 古川彰：環境化と流域社会の変容—愛知県矢作川の河川保全運動を事例に、林業経済研究、51巻1号、林業経済学会、39-49(2005)

<学術誌(査読なし)>

- ① 松田素二：Recapturing the city: Creation of urban rituals in Nairobi, Kenya, presented to the COE International Conference REGIONS IN GLOBALIZATION at CSEAS/ASAFAS Kyoto University, 25-27 (2002年10月)
- ② 松田素二：フィールドワークとリアリティ：東アフリカ都市調査の経験から、『京都社会学年報』第12号(2004年12月)
- ③ 古川彰：半栽培とゆるやかな自然の管理—ヒマラヤから矢作川へ、季刊民族学、101号、千里文化財団、27-35(2005)

<書籍>

- ① 松田素二：創られた王国の彼方に—西ケニア・ワンガ王国史の歴史語りから 山路勝彦・田中雅一編『植民地主義と人類学』関西学院大学出版会 469-489(2002年4月)
- ② 松田素二：『日常実践のエスノグラフィー語り・コミュニティ・アイデンティティ(田邊繁治と共編著)世界思想社(2002年8月)
- ③ 古川彰・松田素二：『観光と環境の社会学』(古川彰と共編著)新曜社(2003年8月)
- ④ 嘉田由紀子編：水をめぐる人と自然—日本と世界の現場から—：有斐閣, 1-358(2003)
- ⑤ 川の日ワークショップ委員会編：川と地域社会：「川と地域社会のかかわりの再生(執筆担当：嘉田由紀子)」学芸出版社(2004年6月)
- ⑥ 嘉田由紀子：遠い水、近い水—水はだれのものか？「水と暮らしの環境文化：槌田劭・嘉田由紀子(編著)」昭和堂, 17-36(2003)
- ⑦ 嘉田由紀子：序章 日本の水、世界の水、「水をめぐる人と自然：嘉田由紀子(編著)」、有斐閣, 1-11(2003)
- ⑧ 松田素二：日常のなかの都市性—あるケニア人一族の100年間の都市経験から、関根康正編『〈都市的なるもの〉の現在—文化人類学的考察』東京大学出版会、241-271(2004年2月)

<報告書類等>

- ① 嘉田由紀子：「水辺の100年を写真で語る」うみんど25号, 2-3(2002)
- ② 嘉田由紀子：かんぽ資金 297号, 10-15(2002)
「水環境保全と水の有効活用—世界的見地からみる下水問題と日本の経験」
- ③ 嘉田由紀子：セヌ川も里川だった—人と自然の距離を手がかりに—、水の文化交流フォーラム2003アブストラクト、(ミツカン水の文化センター)、7-11(2003)
- ④ 嘉田由紀子：「「遠い水」「近い水」—住民による水環境の自治を琵琶湖の事例から考える—」、In:『人間・社会環境学の構築ワークショップ報告書2』：名古屋大学大学院環境学研究科(編著)、名古屋大学大学院環境学研究科、60-75(2005)

(2) 口頭発表

- ① 嘉田由紀子：日本・欧米・アフリカに見るし尿文化と水問題— 水域の富栄養化問題と水洗便所文化—：第3回日本トイレ協会交流会(2002年11月1日、於：京都市)
- ② Yukiko Kada. 3rd World Water Forum, Ohtsu. Japan, 2003
“Water Sanitation and Children’s life in the developing countries compared with the developed countries ”
- ③ 嘉田由紀子：日本・欧米・アフリカに見るし尿文化と水問題— 水域の富栄養化問題と水洗便所文化—：第3回日本トイレ協会交流会(2002年11月1日、於：京都市)
- ④ Yukiko Kada. 3rd World Water Forum, Ohtsu. Japan, 2003
“Water Sanitation and Children’s life in the developing countries compared with the developed countries ”
- ⑤ Motoji Matsuda. 2003 International Symposium at National museum of Ethnology, Osaka
“Preserving the Cultural Heritage of Africa: Crisis or Renaissance?”

9-11 December 2003 “ How the Maragoli Forest disappeared”

- ⑥ 嘉田由紀子：「比較所有論から見た資源と環境：アメリカ・アフリカ・日本」、2004年環境経済政策学会研修セミナー(環境経済政策学会)京都大学芝欄会館(京都市 2003年3月14日)
- ⑦ 松田素二：「アフリカの歴史と社会から何を学ぶか」2003年5月31日 島根大学日本アフリカ学会第40回学術大会公開講演
- ⑧ 嘉田由紀子：「水辺環境変遷を今昔写真でたどるー比較環境社会学的調査手法の提案として」、平成15年度 第7回琵琶湖博物館研究セミナー 滋賀県立琵琶湖博物館(大津市 琵琶湖博物館、2003年11月14日)
- ⑨ 嘉田由紀子：「琵琶湖から太湖へのメッセージー よりよい水環境回復のための流域管理の考え方を水文化論からさぐるー」2004年11月1日、太湖水環境修復モデルプロジェクト 04流域セミナー
- ⑩ 鳥越皓之：「水辺の暮らしと市民活動の可能性」霞ヶ浦環境科学センター開設記念(2005)
- ⑪ 古川彰：「地域資源の総合管理をめざして」(林業経済学会大会2005年春期大会シンポジウム)(2005年3月30日,北海道大学)

(3) 出願特許

なし

(4) シンポジウム、セミナーの開催(主催のもの)

「アフリカ、エコトイレ導入セミナー」(2003年3月18日 於：琵琶湖博物館)

アフリカ、マラウイからの住民・研究者3名を招いて、全体30名ほどの国際セミナー開催

(5) 一般への公表・報道等

<博物館展示>

- ① 琵琶湖博物館ギャラリー展示「世界の水辺の暮らし100年ー今昔写真と生活用具で探る」2003年3月11日-4月6日、琵琶湖博物館企画展示室
- ② 上記ギャラリー展示の記者資料提供(2003年3月6日、於滋賀県庁にて)

<新聞>

- ③ 京都新聞(2005年1月9日朝刊)：
琵琶湖、問われる水の管理ー60年目の肖像ーダム建設、利水から治水へ
- ④ 産経新聞(2005年1月31日朝刊)：川と暮らしの再発見
- ⑤ 農業共済新聞(2005年3月23日朝刊)：し尿の価値を知ってほしいーズバリ直言ー
- ⑥ 嘉田由紀子：「琵琶湖をめぐる政策・環境史」.環境社会学会台29回セミナー.(環境社会学会).BRC琵琶湖リゾートクラブ (守山市).[特別インタビュー](2004年6月26日)

<シンポジウム、講演会での公表>

- ⑦ 嘉田由紀子「途上国の衛生確保へー「使い回し」の発想も」、世界水フォーラム新聞、2003

年3月16日,4面

- ⑧ 「Twelve Years' History of Japanese Association for the Environmental Sociology: Its Philosophy, Theory, Practice and Social Challenge」.2004 IRA RC24 Conference in Seoul.(International Sociological Association/Rc24).Hoam Faculty House Seoul National University(Seoul,Korea).[嘉田由紀子:Presentations] (2004年6月28日)
- ⑨ 「湖西地元学への誘い」湖西・森と里と湖のミュージアム「地元学」講演会(2004年7月24日、地場産業振興センター(滋賀県))滋賀県湖西地域振興局、[嘉田由紀子:講演]
- ⑩ 「京都の景観資源」の保全と想像」第五回日本景観学会大会講演会(日本景観学会)(2004年7月20日、京大会館(京都市))[嘉田由紀子:コーディネーター]
- ⑪ 「びわ湖水系から見る水問題」第XII期地球環境大学 後期講座(地球環境と大気汚染を考える全国市民会議).(2004年10月2日、大阪府社会福祉会館(大阪市))[嘉田由紀子:講演]
- ⑫ 「Future Water Issues in Asian Contest.」水資源管理機構 総合的水資源管理研修(独立行政法人水資源機構)(2004年10月21日、水資源機構琵琶湖開発総合管理所(草津市))[嘉田由紀子:講演]
- ⑬ 「琵琶湖から太湖へのメッセージよりよい水環境回復のための流域管理の考え方を水文化論からさぐるー」 JICA太湖水環境修復プロジェクト05年地域セミナー(独立行政法人国際協力機構)(2004年11月4日、榴園賓館(南京市))[嘉田由紀子:講演]
- ⑭ 「河川行政の転換と地域社会ー今、改めて公共性を問い直すー」 第28回環境社会学会セミナー(京都)(環境社会学会).(2004年12月14日、京都精華大学(京都市))[嘉田由紀子:パネラー]
- ⑮ 「「遠い水」「近い水」ー住民による水環境の自治を琵琶湖の事例から考えるー」環境問題と公共性ーアジアから考えるー(環境問題と公共性ーアジアから考えるー実行委員会)(2005年2月18日、名古屋大学(名古屋市))[嘉田由紀子:講演]
- ⑯ 「子どもと大人の車座会議ー地域流9域再生」子どもがつくる未来の川車座会議(子どもと川とまちのフォーラム)(2005年3月6日、コミュニティ嵯峨野(京都))[嘉田由紀子:コーディネーター]
- ⑰ 「水をめぐる環境と文化」シンポジウム丹波学トーク((財)生涯学習かめおか財団)(2005年3月12日、ガレリアかめおか(京都))[嘉田由紀子:講演]
- ⑱ 総括討論「幸福のフィールドワークの可能性」 関西学院大学CEOワークショップ2004 関西学院大学 (2005年3月17日、関西学院大学(西宮市))[嘉田由紀子:討論者]
- ⑲ 「川と暮らし」まちなかの川フォーラム(大津中央ロータリークラブ)(2005年3月19日、大津プリンスホテル (大津))[嘉田由紀子:講演]

8. 成果の政策的な寄与・貢献について

例:国土交通省近畿地方整備局による淀川流域委員会における河川整備計画の策定過程への住民参加制度の検討において、本研究成果である今昔写真による住民意見聴取の方法について表現をし、今度の流域整備計画の基礎調査において採用される可能性がでてきた。また2003年3月の第

3回世界水フォーラムにおいては、世界32ヶ国から109名の子どもたちを日本に呼び寄せ世界子ども水フォーラムを開催したが、そこでも今昔写真比較を示すことにより日本の子どもたちは、アフリカなどの途上国での水利用の仕組みが日本でも当たり前であった、という歴史を知り、より親近感をもったようだ。「世代をつなぐことが世界をつなぐ」きっかけにもなった。このような動きは、2004年3月の、水フォーラム1周年の記念事業においても実践され、京都市や京都府が主催する会合での発表を行った。この研究成果は2006年にメキシコで開催予定の第4回世界水フォーラムでも発表を計画している。

文中の写真情報

写真番号	撮影者	撮影日	所蔵/出典
写真1-1	前野隆資	1955<昭和30>年	滋賀県立琵琶湖博物館所蔵
写真1-2	古谷桂信	1997<平成9>年5月23日	滋賀県立琵琶湖博物館所蔵
写真2-1	前野隆資	1955<昭和30>年	滋賀県立琵琶湖博物館所蔵
写真2-2	古谷桂信	1997<平成9>年4月19日	滋賀県立琵琶湖博物館所蔵
写真3-1	前野隆資	1956<昭和31>年8月5日	滋賀県立琵琶湖博物館所蔵
写真3-2	古谷桂信	1997<平成9>年8月12日	滋賀県立琵琶湖博物館所蔵
写真4-1	不明	不明	出典『旧京映像』,著者名なし,林業出版社,2001,p43
写真4-2	鳥越皓之	2002<平成14>年4月	鳥越皓之
写真5-1	不明	不明	出典『旧京映像』,著者名なし,林業出版社,2001,p121
写真5-2	鳥越皓之	2002<平成14>年4月	鳥越皓之
写真6-1	不明	不明	出典 楊信『京城老行当』新華出版社,2001,p97,99
写真6-2	不明	不明	出典 楊信『京城老行当』新華出版社,2001,p97,99
写真7	不明	不明	鳥越皓之
写真8-1	嘉田由紀子	1986<昭和61>年8月26日	嘉田由紀子
写真8-2	嘉田由紀子	不明	嘉田由紀子
写真9	嘉田由紀子	2005<平成17>年3月21日	嘉田由紀子
写真10	嘉田由紀子	2005<平成17>年3月22日	嘉田由紀子
写真11-1	不明	2001<平成13>年	無錫市都市計画局
写真11-2	不明	不明	無錫市都市計画局
写真12	嘉田由紀子	2004<平成16>年11月2日	嘉田由紀子
写真13-1	不明	不明	無錫市都市計画局
写真13-2	嘉田由紀子	2004<平成16>年11月2日	嘉田由紀子
写真14-1	不明	不明	無錫市都市計画局
写真14-2	不明	不明	無錫市都市計画局
写真15-1	不明	不明	無錫市都市計画局
写真15-2	不明	不明	無錫市都市計画局
写真16-1	不明	不明	無錫市都市計画局
写真16-2	不明	不明	無錫市都市計画局
写真17-1	不明	不明	古川 彰
写真17-2	不明	2002<平成14>年7月24日	古川 彰
写真18-1	不明	不明	古川 彰
写真18-2	不明	2002<平成14>年2月2日	古川 彰
写真19	不明	2002<平成14>年7月28日	古川 彰
写真20-1	金菱 清	2002<平成14>年8月	金菱 清
写真20-2	金菱 清	2002<平成14>年8月	金菱 清
写真21-1	NECRI	2002<平成14>年8月	古川 彰
写真21-2	NECRI	2002<平成14>年4月23日	古川 彰
写真22	不明	1900<明治33>年頃	Paul Guichonnet, Le guide du Lemman, 1988, Nyon:La Manufacture, p193.
写真23-1	C. モネ(ポストカード)	1905<明治38>年頃	レマン湖博物館所蔵
写真23-2	イブ・ブサー	2000<平成12>年10月9日	レマン湖博物館所蔵
写真24-1	ペロシエ・マティル(ポストカード)	1905<明治38>年頃	レマン湖博物館所蔵
写真24-2	イブ・ブサー	2000<平成12>年10月9日	レマン湖博物館所蔵
写真25-1	MLIF(ポストカード)	1900<明治33>年頃	レマン湖博物館所蔵
写真25-2	イブ・ブサー	2001<平成13>年1月22日	レマン湖博物館所蔵
写真26-1	ジュリアン兄弟(ポストカード)	1905<明治38>年頃	レマン湖博物館所蔵
写真26-2	イブ・ブサー	2000<平成12>年10月23日	レマン湖博物館所蔵
写真27-1	ペロシエ・マティル(ポストカード)	1900<明治33>年頃	レマン湖博物館所蔵
写真27-2	イブ・ブサー	2000<平成12>年10月23日	レマン湖博物館所蔵
写真28-1	ジュリアン兄弟(ポストカード)	1900<明治33>年頃	レマン湖博物館所蔵
写真28-2	イブ・ブサー	2000<平成12>年10月25日	レマン湖博物館所蔵
写真29-1	L. フォラズ(ポストカード)	1900<明治33>年頃	レマン湖博物館所蔵
写真29-2	イブ・ブサー	2001<平成13>年1月22日	レマン湖博物館所蔵
写真30-1	C.P.N(ポストカード)	1900<明治33>年頃	レマン湖博物館所蔵
写真30-2	イブ・ブサー	2001<平成13>年2月14日	レマン湖博物館所蔵
写真31-1	ジュリアン兄弟(ポストカード)	1900<明治33>年頃	レマン湖博物館所蔵
写真31-2	イブ・ブサー	2000<平成12>年11月19日	レマン湖博物館所蔵

写真番号	撮影者	撮影日	所蔵/出典
写真32-1	不明	1910<明治43>年	シーベルジェ/パリ写真史料館/国有記念建造物センター所蔵
写真32-2	ローラン・ベッソル	2000<平成12>年11月	パリ国立自然史博物館所蔵
写真33-1	不明	1911<明治44>年	J. ボルジェ版權保有
写真33-2	ローラン・ベッソル	2000<平成12>年11月	パリ国立自然史博物館所蔵
写真34-1	不明	1908<明治41>年	ポイヤー・ビオレ所蔵
写真34-2	ローラン・ベッソル	2001<平成13>年3月	パリ国立自然史博物館所蔵
写真35-1	不明	江戸末期頃	コンフラン・サント・オノリンボート博物館所蔵
写真35-2	ローラン・ベッソル	2000<平成12>年11月	パリ国立自然史博物館所蔵
写真36-1	不明	1900<明治33>年頃	LLビオレ所蔵
写真36-2	不明	1910<明治43>年頃	ビオレコレクション所蔵
写真37	-	-	出典 Victor Fournel "Les rues de vieux Paris"
写真38-1	嘉田由紀子	2002<平成14>年8月5日	嘉田由紀子
写真38-2	嘉田由紀子	2002<平成14>年8月5日	嘉田由紀子
写真38-3	嘉田由紀子	2002<平成14>年8月5日	嘉田由紀子
写真39-1	鳥越皓之	湖水地方最古の絵と言われている。1797年発行の本に収録。	出典 William Gell A Tour in the Lakes 1797 (ed. William Rollinson, Smith Settle Ltd, 2000)
写真39-2	鳥越皓之	2003<平成15>年11月	鳥越皓之
写真40	鳥越皓之	2003<平成15>年11月	出典 Peter Bicknell(ed.), The Illustrated Wordsworth's Guide to the Lakes
写真41-1	不明	1864年	出典 Kurkston summit, John Marsh & John Garbutt, Wordsworth's Lake Land, Sutton Published Ltd, 1997, p90-91
写真41-2	鳥越皓之	2003<平成15>年11月	鳥越皓之
写真42-1	鳥越皓之	不明	出典 John Marsh & John Garbutt, Wordsworth's Lake Land, Sutton Published Ltd, 1997, p14
写真42-2	鳥越皓之	2003<平成15>年11月	鳥越皓之
写真43-1	鳥越皓之	1815年	アーミッドミュージアム所蔵
写真43-2	鳥越皓之	2003<平成15>年11月	鳥越皓之
写真44-1	ロー・ロウ・マッコネル	1946<昭和21>年	滋賀県立琵琶湖博物館所蔵
写真44-2	嘉田由紀子	2001<平成13>年7月24日	嘉田由紀子
写真45-1	ロー・ロウ・マッコネル	1946<昭和21>年	滋賀県立琵琶湖博物館所蔵
写真45-2	嘉田由紀子	2001<平成13>年7月24日	嘉田由紀子
写真46-1	ロー・ロウ・マッコネル	1946<昭和21>年	滋賀県立琵琶湖博物館所蔵
写真46-2	嘉田由紀子	2002<平成14>年8月20日	嘉田由紀子
写真47-1	ロー・ロウ・マッコネル	1946<昭和21>年	滋賀県立琵琶湖博物館所蔵
写真47-2	嘉田由紀子	2001<平成13>年7月24日	嘉田由紀子
写真48-1	嘉田由紀子	2002<平成14>年	嘉田由紀子
写真48-2	嘉田由紀子	2002<平成14>年	嘉田由紀子
写真49-1	嘉田由紀子	2002<平成14>年	嘉田由紀子
写真49-2	嘉田由紀子	2002<平成14>年	嘉田由紀子
写真50	不明	1954<昭和29>年6月	松田素二
写真51-1	不明	不明	松田素二
写真51-2	不明	不明	松田素二
写真52-1	不明	1959<昭和34>年	松田素二
写真52-2	不明	1961<昭和36>年	松田素二
写真53-1	不明	不明	松田素二
写真53-2	不明	不明	松田素二
写真54-1	不明	1920<大正9>年	フォトレックス写真館所蔵
写真54-2	古谷桂信	2002<平成14>年2月6日	滋賀県立琵琶湖博物館所蔵
写真55-1	不明	1928<昭和3>年	フォトレックス写真館所蔵
写真55-2	古谷桂信	2002<平成14>年2月7日	滋賀県立琵琶湖博物館所蔵
写真56-1	古谷桂信	2002<平成14>年2月10日	滋賀県立琵琶湖博物館所蔵
写真56-2	古谷桂信	2002<平成14>年2月2日	滋賀県立琵琶湖博物館所蔵
写真56-3	古谷桂信	2001<平成13>年9月18日	滋賀県立琵琶湖博物館所蔵
写真57-1	古谷桂信	不明	滋賀県立琵琶湖博物館所蔵
写真57-2	古谷桂信	不明	滋賀県立琵琶湖博物館所蔵
写真58-1	古谷桂信	不明	滋賀県立琵琶湖博物館所蔵
写真58-2	古谷桂信	不明	滋賀県立琵琶湖博物館所蔵
写真59	古谷桂信	不明	滋賀県立琵琶湖博物館所蔵

写真番号	撮影者	撮影日	所蔵/出典
写真60-1	不明	1900<明治33>年頃	ウイスコンシン州立歴史資料館所蔵
写真60-2	嘉田由紀子	1999<平成11>年8月	滋賀県立琵琶湖博物館所蔵
写真61-1	不明	1907<明治40>年	ウイスコンシン州立歴史資料館所蔵
写真61-2	アンドリュー・ロシター	2001<平成13>年6月	滋賀県立琵琶湖博物館所蔵
写真62-1	不明	撮影時期不明	トーマス・D・ブロック個人蔵
写真62-2	アンドリュー・ロシター	2001<平成13>年6月	滋賀県立琵琶湖博物館所蔵
写真63-1	不明	1906<明治39>年	ウイスコンシン州立歴史資料館所蔵
写真63-2	アンドリュー・ロシター	2001<平成13>年6月	滋賀県立琵琶湖博物館所蔵
写真64-1	不明	1923<大正12>年	ウイスコンシン州立歴史資料館所蔵
写真64-2	アンドリュー・ロシター	2001<平成13>年6月	滋賀県立琵琶湖博物館所蔵
写真65-1	ジョン・ノレン	1911<明治44>年	出典『マジソン:あるモデル都市』(ボストン,1911)
写真65-2	アンドリュー・ロシター	2001<平成13>年6月	滋賀県立琵琶湖博物館所蔵
写真66-1	不明	1905<明治38>年	ウイスコンシン州立歴史資料館所蔵
写真66-2	アンドリュー・ロシター	2001<平成13>年6月	滋賀県立琵琶湖博物館所蔵